



PRODUCCIONES
ARCO

BLANCA PARDO

PRODUCCIONES
ARTISTICAS CORPORATIVAS

CHOLULA 54-3
COL. CONDESA, MEXICO 06100 D.F.
TEL. 286 □ 2034
FAX 520 □ 3576

『マランドロ』第一稿台本訂正

<第1幕>

- 1 - 8 最後の行 「マックス つづけて」をカット
- 1 - 9 1 ~ 2 行目のタイガーの台詞を 9 行目と 10 行目の間に移動
- 1 - 12 13 行目に、14 の 11 行目 ~ 15 の 5 行目を挿入。
- 1 - 14 14 行目からは、歌の続き
- 1 - 21 7 行目 はいると⇒はけると
- 1 - 28 11 行目、13 行目のジェニはライムンダ
- 1 - 29 1 行目、3 行目のジェニはライムンダ
- 1 - 47 10 行目 M9『もしバトロンだったら』インスト(ダンスナンバー)

<第2幕>

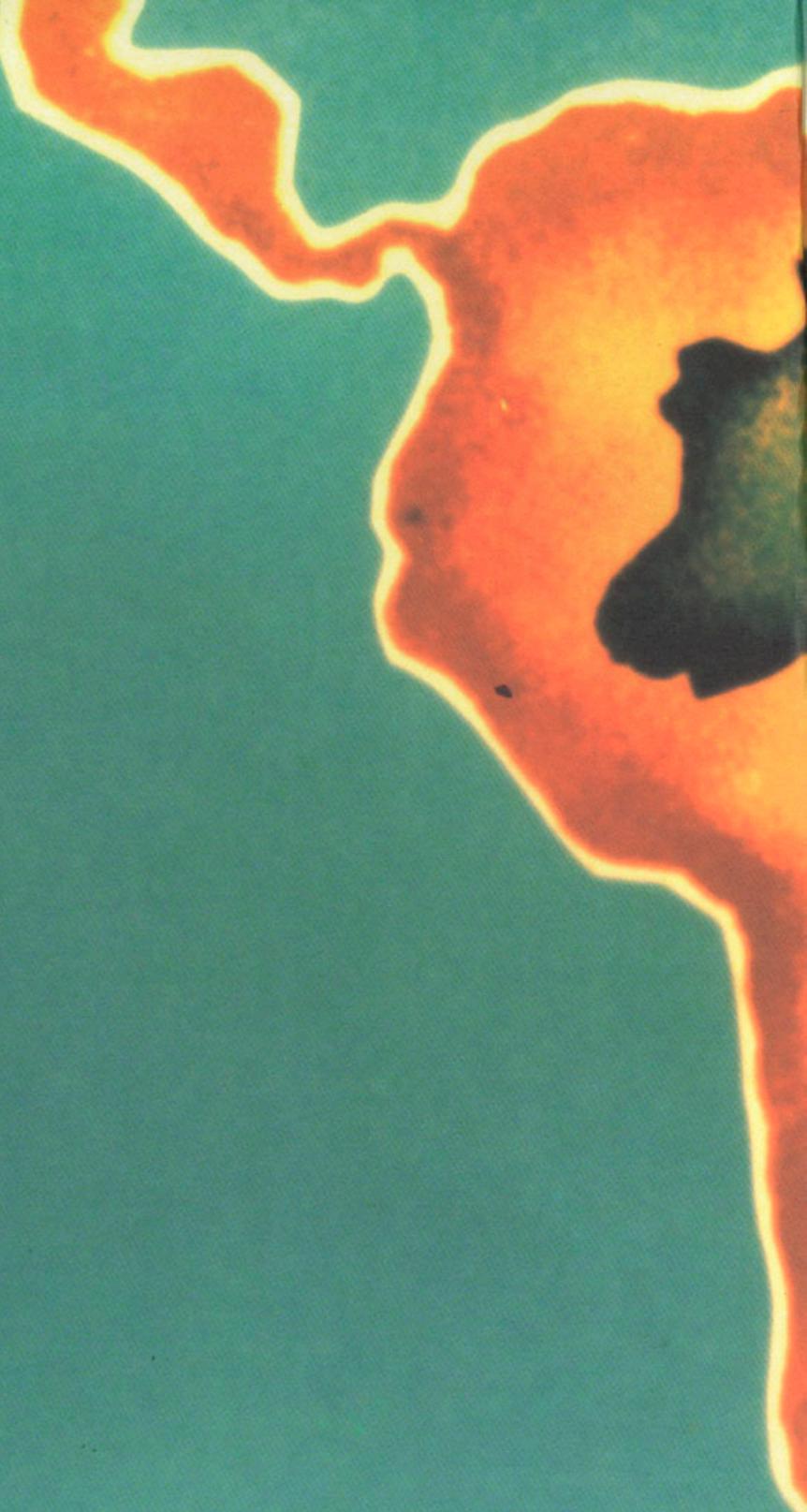
- 2 - 16 2 行目 『もし今ばれちゃったら』(ダンスナンバー)
- 2 - 16 7 行目 ~ 11 行目は間奏部分の台詞
- 2 - 27 6 行目 だったらどうして！ そうかあのドイツ野郎
- 2 - 27 7 行目 肩書⇒看板
- 2 - 27 16 行目 ピストロ⇒ピストル
- 2 - 42 8 行目 いたのか？⇒久し振りだな。よっ、サティロ。
- 2 - 43 6 行目 あいつら⇒サティロのはかやろう
- 2 - 45 4 行目 M20 未定『コバカバーナの娘たち』(ダンスナンバー)
- 2 - 49 2 行目 タイミング⇒そり

*以上、お手数ですが御訂正よろしくお願ひ致します。

OPERA DO MALANDRO



BRAZILIAN MUSICAL
MALANDRO
BY CHICO BUARQUE DE HOLLANDA



BRASIL

◆ 松竹7月公演
宮本顕門 演出
井上龜之 音楽監督
フランシスコ・モジカホ

マランドロ

1990年7月6日～28日
開演：2:00 P.M. 5:30 P.M.（土曜のみ）12:00 P.M. 5:00 P.M.
料金：A席10000円 B席8000円 C席3000円（税込）
製作：松竹株式会社
アトリエ・ダンカン

ご挨拶

昭和62年12月当劇場で大成功を収めました「A C B」以来、ミュージカル2本目の主演となります田原俊彦さんと、今大変高い評価を受けております若手演出家、宮本亜門さんの初顔合わせで、斬新なミュージカルを——それが池田蓮彦プロデューサーと共に「マランドロ」企画の出発でした。

数年前から文学、芸術をはじめラテン・アメリカ文化に关心が高まり、音楽界でもランバダに代表されるブラジル音楽が世界的に注目されております。若いお二人の顔合わせには、ブロードウェイやロンドンのミュージカルではなく、勢いあるブラジル・ミュージカルの方が刺激的な組み合わせとなるに違いありません。

日本ロック界のスターであるバービーポーイズの杏子さん、子供バンドのうしきつよしさんと、高岡早紀さんとの共演によって、いっそう舞台は若々しく、エネルギー満ちるものとなるはずです。

カーニバルの都・リオを舞台にくりひろげられる熱いミュージカルにご期待下さいまして、真夏の舞台をお楽しみくださいますようお願い申し上げます。

永山武臣

松竹株式会社社長

PRESIDENTE TAKEOHI NAGAYAMA

メッセージ

この度、東京にてミュージカル“Opera do Malandro”の上演に当たり、日本のファンの皆様にご挨拶する事を欣快とします。

ブラジル音楽界で傑出した存在であるシコ・ファルキ・ジ・オランダはその世代の最も表現力に富んだシンガー・ソングライターの一人であり、ブラジルの豊かな音楽的伝統を映し出し、特異な感性と見事な美的洗練さをもつ独特なスタイルを創りあげました。雰囲気は強烈にブラジル的で、精神は普遍的な“Opera do Malandro”の多彩で興味深い場面は、日本の観衆を魅了するものと期待します。

このイベントの主催者に敬意を表し、この公演が日伯両国の人々の更なる文化交流に貢献するものと確信します。

1990年6月8日

カルロス A. B. ブエノ

駐日ブラジル大使

EMBAIXADOR DO BRASIL CARLOS A.B. BUENO

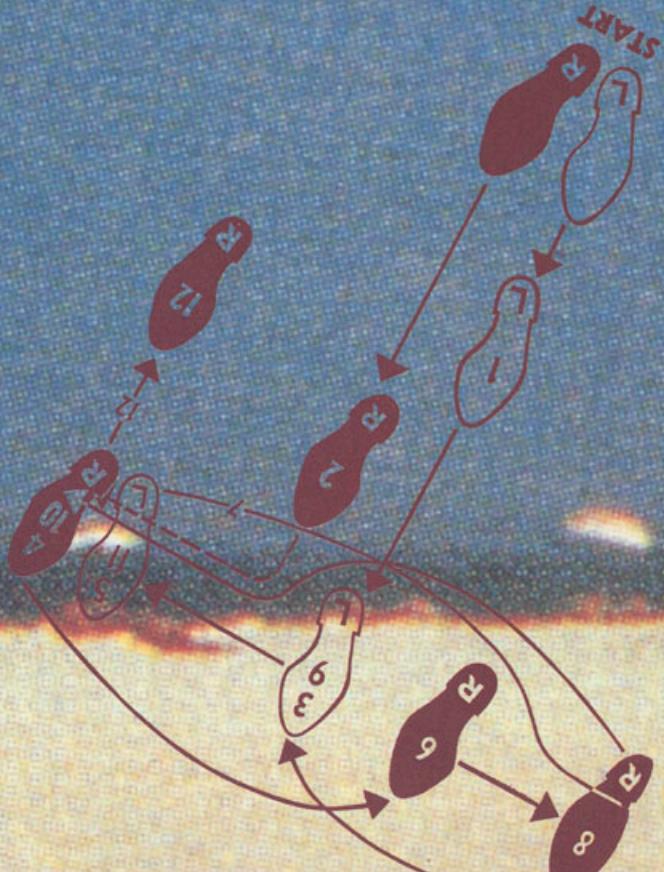
MENSAGEM

E com satisfação que me dirijo ao público japonês por ocasião da montagem da "Opera do Malandro" em Tóquio.

Chico Marques de Hollanda, cujo nome ocupa lugar de destaque no panorama musical brasileiro, é dos mais expressivos músicos e poetas da sua geração, sendo criador de um estilo que, ao refletir as ricas tradições musicais do Brasil, tornou-se singularmente sensibilidade e de notável refinamento estético. Estou certo de que o público japonês poderá apreciar os variados e interessantes aspectos da "Opera do Malandro", intensamente brasileira pela ambientação e notavelmente universal pelo espírito.

Congratulo-me, portanto, com os organizadores desse evento que, certamente, muito contribuirá para enriquecer as relações culturais entre o Japão e o Brasil.


Carlos A.B. Bueno
Embaixador do Brasil



マランドロ

演出 宮本亜門

1941年の暮。ブラジルはリオを舞台に、この物語はすすめられます。ちょうど政府が世論の反対を押し切り、ドイツ・ナチ政権を支持する声明を発表した悲劇的な年です。

しかし、その頃、映画産業は大盛況。人々は、ハリウッド映画を求める長蛇の列をつくっていたそうです。きっと映画館の暗闇でしか、自由とアメリカへのあこがれを抱けなかつたのでしょう。

そんなリオで生まれたこの作品が、1990年の東京で上演される意義を私は考えます。

何ひとつ不足がないと、自分の事で満足しそうな今でも、ちょっと世界に目をむければ、恐ろしい現実があります。

批評するだけではない、意識ある行動はとれないものか、ちょっと考えてみて下さい。

我らがマックスの言葉を、あなたはどう思われますか？

本日はご来場ありがとうございました。

DIRETOR AMON MIYAMOTO

ELENCO

MAX TOSHIHIKO TAHARA
MARGOT KYOKO
TIGRÃO TUYOSHI UJIKI
LU SAKI TAKAOKA
SATIRO JAY KABIRA
FIORERA SYOKO NAKAJIMA
JOHNNY WALKAR YOSHIIKU NOO
RAIMUNDA NAOMI TOMITA
NAZISTA KENZO KANEKO
GENI NARUSHI IKEDA
VICTORIA KEIKO NAKAJIMA
OTTO TORU MINEGISHI
DANGARINO MICHIIRO ARIMURA
TAKESHI ISHIYAMA
HITOSHI INOUE
TAKESHI OSHIMA
TUYOSHI OSHIMA
SHIGEO KATO
NARIO KATO
YUTAKA KOGA
HIDERO SHIMIZUOTO
KINOSHITA TSUYOSADA
KINOSHITA TSUYOSADA
DANGARIN SYOJI TSUYOSADA
MASAFUMI TSUYOSADA
RUMI TSUYOSADA
YUMI TSUYOSADA
MAKOTO TSUYOSADA
JUNICHI TSUYOSADA
MAMI TSUYOSADA
MAYUMI TSUYOSADA
HONAMI HIDE
URAN HIROYASU
SYUKO HONMA
KEIKO MATOMOTO
SARA MIGIE
EIKO MIKOME

FICHA TÉCNICA

PRODUZIR MICHIIRO IKEDA
DIRETOR COREOGRAFIA AMON MIYAMOTO
DIRETOR MUSICAL TAKAYUKI INOUE
ASSISTENTE DE DIREÇÃO MUSICAL MASATO KAI
SCRIPT MAKOTO TADA
TRADUÇÃO E LETRAS KIMIYUKI OBA
COREOGRAFIA KIYOMI MAEDA
CORPOGRAFIA BOBI YOSHINO
HEISUKE WADA
TAMOTU HARADA
YOICHI YAMANAKA
MIHOKO KIYOKAWA
KEIKOU HYO
SEIRO SAKAMOTO
YOJI MISAWA
JYUNKO CYUJYO
NOBUO FUKAMI
MASATAKA SEZAKI
NAMI NOZAWA
HIROKO YANAGI
KAORU TANAKA
SATOSHI MORI
MARTHIN NEIRA
GIEN KOIKE
MITUHIRO TAKAMOTO
MIHO KOYAMA
TAKESHI KANBE
MASAKO TANAKA
KEI MORISHITA
NAOKO SUZUKI
NOBUYUKI ONUMA
SHOCHIKU CO., LTD.
ATELIER DANCAN

COORDENADORES
COORDENADOR DE TÉCNICO
COORDENADOR DE ORQUESTRA
NOTAÇÃO NA PROPAGANDA
DIRETOR DE PRODUÇÃO
DIRETÓRIO DE PRODUÇÃO
DIRETÓRIO DE PRODUÇÃO
DIRETÓRIO DE PRODUÇÃO
PRODUÇÃO
ACOUSTÉO SHINYA YODOUCHI
TROMPETE KENJI YOSHIDA
TROMPETE TOKUJI SUZUKI
SOPROS BOB SAITO
SOPROS SEIGO IGARASHI
SOPROS KATSUMI TAJIMA
GUITARRA HIROSHI NAGASHIMA
BAIXO HIROSHI ARIKI
BATERIA EUMICHI KOND
TROMBONE YOSHIMIRO ZAMA
VIOLINO MIKO ISHIBASHI
TECLADOS RYUICHI KOBAYASHI

BANDA

A ORQUESTRA DO MALAN
COMANDAR TAKAYUKI INOUE
PIANO RINZU FURUTA
LATINO PERCUSSÃO KUNIHARU IMURA
PERCUSSÃO KOICHI UCHIYAMA
ACOUSTÉO SHINYA YODOUCHI
TROMPETE KENJI YOSHIDA
TROMPETE TOKUJI SUZUKI
SOPROS BOB SAITO
SOPROS SEIGO IGARASHI
SOPROS KATSUMI TAJIMA
GUITARRA HIROSHI NAGASHIMA
BAIXO HIROSHI ARIKI
BATERIA EUMICHI KOND
TROMBONE YOSHIMIRO ZAMA
VIOLINO MIKO ISHIBASHI
TECLADOS RYUICHI KOBAYASHI

CAST

STAFF

マックス	田原俊彦	プロデューサー	池田道彦 (アトリエ・ダンカン)	衣装製作	株ガリレオ・ガリレイ
マルコ	杏子	演出・振付	宮本亜門		清川美保子
タイガー	うしき つよし	音楽監督	井上亮之		二村寿子
ルー・シトローデル	高岡早紀	音楽助手	甲斐正人		谷口洋子
サティロ	川平慈英	脚本	多田 誠		佐野久江
フィオレラ	中島唱子	訳・作詞	大場公之		長谷川ちより
ジョニー・ウォーカー	乃生佳之	振付	前田清実		扇田紅果
ライムンダ	宮田直美		ホビー吉野		間口綾子
ナチ、神様	金子研三		和田平介		梅田栄子
ジェニ	池田成志	美術	原田 保	特殊効果	小山文枝
ヴィクトリア・シトローデル	中島啓江	照明	山中洋一	照明助手	SPARK
オットー・シトローデル	峰岸 鶴	音響	清川美保子	音響オペレーター	藤巻 聰
		衣装	鴻 喜孝		サウンド・クラフト
		ヘア・メイク			矢野二郎
マランドロ選					北森千晴
カフルス	石内通博	演出助手	坂本聖子	協力	株ジャニーズ事務所
シーコ	石山 稔	歌唱指導	三沢洋史		
ベルナルド	井上仁司	稽古ヒアノ	中條純子	製作協力	松竹芸能株式会社
ジュナ	内田晃一	舞台監督	深見信生		
ジャック	大島 敏	演出部	瀬崎将孝	製作	松竹株式会社
リフ	大脇ひろし		野沢奈美		アトリエ・ダンカン
ペビージョーンズ	加藤成夫		柳 広子		
アントニオ	古賀 豊		田中 薫		
ヴァン・シグ	嶋本秀朗		森 昭		
テアロ	鎌形比呂一	コーディネーター	マーヴィン・ネイラー		
トニー	徳永邦治	スタッフ・コーディネーター	小池義園(スタッフ・エン)		
ピフ	中山なん太	オーケストラ・コーディネーター	高木光広(アップライト・ミュージック)		
コンサレス	治田 敏	音楽監督	小山聰景(スタッフ・エン)		
出島選		制作助手	柳戸 文京(スタッフ・エン)		
フィシーニャ	あじみゆ子	ケイタリング	田中昌子		
シャーリー	石川 香	制作	西下 駿(松竹株式会社)		
ベッサイ	江夏ルミ	制作	鈴木栄輔子(アトリエ・ダンカン)		
タス	金澤由美子				
ベル	上月真琴	監修	大沼信之(松竹株式会社)		
トレーシャ	佐々木潤子				
アトリエ・ナ	永久真美	大道具	俳優座劇場舞台美術部		
ミ	夏 まゆみ	小道具	舞台美術監修		
ナナ	秋田まなみ				
ローズ	庄司うちん				
マルガリータ	本山恵子				
ノーマ	松本圭子				
ケティ	汀映蒼良				
ルシア	見米絵子				
	(アイウエオ劇)				

ムーラ・オルケストラ・ド・マランド

楽器

井上亮之

ピアノ

吉田俊子

リード

田島清美

ラテン・バーカッショń

木村邦治

ギター

永島 広

バーカッショń

内山暁一

ベース

有田 実

アコーディオン

横内信也

ドラムス

近藤文理

トランペット

吉田憲司

パッショーン

越山吉弘

トランペット

鈴木徳司

ヴァイオリン

石橋美恵

リード

ボブ齊藤

キーボード

小林裕一

リード

五十嵐正剛





CONTO

S
TORY



1941年のリオ・デ・ジャネイロ。

第二次世界大戦の重く暗い影は容赦なくこの街にも襲いかかろうとしている。

だが今夜もまた、オカマのジェニはしゃれたジョークを飛ばし——いや今夜は少し風向きが違うようだ。^{いと}愛しのマックスを想うあまりか……？

そんなことはお構いなしに勝手気ままにその日を楽しむマンドロ・マックス。

彼は幼友達であり、今は法の番人となったタイガー警部から娼婦マルゴを奪い取った。タイガーはその腹いせを売春宿のナチ親父シュトリューデルにぶつけ、マルゴはホサれるはめになってしまう。

それを聞いたマックスはシュトリューデルの一人娘ルーをたぶらかし、金を巻き上げる計画をたてる。ところが、学校の教師と問題を起こし退学処分になり、事業家の夢を膨らませる発展家ルーだ。そうそうマックスの思うようにはいくはずがない。

マックスの商才に目をつけたルーは彼と組んで輸入業を始めようと持ち掛ける。

マックスはルーの思惑にまんまとはまり、結婚することになってしまった。

一方、それを知ったシュトリューデルはタイガー警部を「お前の悪事を暴露してやる!」と脅し、マックスを国外へと追放する。

だがマックスは懲りずに戻ってきてマルゴとよりを戻し、二人でアルゼンチンへ逃げようとした。

そんなことをタイガーが許すはずがない。

リオのカーニバルを舞台に繰り広げられる男と男の宿命の対決。

響く銃声の音。

突然ジェニが叫ぶ……。



MUSICA DIRETOR TAKAYUKI INOUE

音楽監督
井上堯之

シコの音楽

ラテン音楽。ミュージシャンの間でどんなに話題になろうと、その素晴らしさをどんなに説かれようと、決して口説かれるものかとばかり、断固抵抗し続けてきた。

決して縦割りできない、複雑極まりないあのリズム、あの騒々しさにうんざりする方だ。

あの有名な映画「黒いオルフェ」を観たときも冷淡だった。つまり、よくわからなかつたのである。わからないことは面白くない。面白いと思えるものは、よく理解出来るということでもある。

さて、このたびの「マランドロ」。シコ・ブルキの曲は最高に面白い。面白いということは解るということである。感覚的にも生理性にも素晴らしいものだと直感したが、しかしアカデミックには、私には難解そのものである。従ってこの仕事は、私には大変な苦労だと覺悟した。

そんな時に甲斐正人さんが、「自分にも手伝わせろ、助手でもなんでもいいから」と申し出してくれた。このことに感激したことは言うまでもないが、もうひとつ、こりゃ大変だと彼が頭を抱えこんだこともうれしかつた。

彼は「ブラジル人が佐渡おけさを歌うようなものだ」と言ったのである。それ程難しいと言つたのである。「そうだよなあ」と私。

しかし、その私はと言えば、甲斐さんに苦労を全部押しつけて、ただただシコ・ブルキの音楽に魅せられ、その才能にときめきを覚え、溜め息をつくばかりで、それはもう私の宝物となってしまったのである。

リハーサルトシちゃん(ラテンがよく似合う)はじめ出演者全員すごい顔ぶれ、バンドもすごい。よくまあ、こんな難しい曲を歌えるものだと感心しつつ確かな手応えを感じている。

私のギターで中島啓江さんが歌う。ギターはラテンというより歌謡曲になる。でももう大丈夫。ブラジル人の佐渡おけさよりはマシだと思う。

TRADUÇÃO KIMIYUKI OBA

訳・作詞
大場公之

ラテンの魅力

アメリカ産、イギリス産、そしてラテンの香りブンブン、ブラジル産ミュージカルの登場です。サンバと言えば真夏のイメージがありますし、音楽的にも今ブームのラテン、どれを取ってもタイムリーな公演ではないでしょうか。

ラテン音楽には、今までのミュージカルで表わせなかつたような、人間の内側のドロドロとした感情がより素直に表現できる、不思議な魅力がある様に思います。それには、人が必ずと言って良い程経験する「愛」がふくまれています。このミュージカルにも、いろいろな愛の形を唄つた歌が沢山あります。何かが起りそうと期待する愛、行き場のない愛に苦しむ歌、眞実の愛を誓おうとする歌。

これらの中に、何か皆さんの気持ちに少しでも触れる歌があれば、私としては大変嬉しい思います。そして、主人公マックスの生き方をどう感じるかも、楽しみのひとつです。



CANÇÃO

『コパカバーナの娘たち』

むし暑い夜 身体をもてみましてるなら
ここへおいでよ コパカバーナ
真夏の夜の夢 コパカバーナ
お説み次第 何でもお相手するわ
ルンバで踊る コパカバーナ
夜通し抱かれ コパカバーナ
ママ あたし 手紙書かないけど忘れないでいてね
街では 人気のスターよ あたしは
自慢に出ていいの あなたの娘を

ちょっとスタイルがほしいりや(街では人気よ)

アマゾン娘(あたしはスター)
骨までしゃぶる コパカバーナ
ピラニアみたいな コパカバーナ
ちょっと悪女かほけりや アラビア娘
ふきみな笑い コパカバーナ
ヴェールにかくし コパカバーナ
ママ 今日もお金送るけれど忘れないでいてね
街では人気のスターよ あたしは
自慢に出ていいの あなたの娘を
ルンバで踊る コパカバーナ
夜通し抱かれ コパカバーナ

青い瞳の黒髪 中國娘

スリムで少し日焼けは アフリカ娘
子守り唄にオーラはいいかか イタリア娘
ちょっとピリッとスパイスは インドの娘
鏡口で残飯サディス ロシア娘

『俺とお前』

マックス 勉なしみの 俺とお前
ケンカもしたさ
いつも泣きへそかいてたお前
今でも覚えてる
上から今じゃ 見ちかえちまう
立派な刑事か
俺に言わせりや お前は今も
ただのダチさ

マックス 思い出すたび 笑っちゃさ
昔のお前
できそこないで 立たされ功主
落ちこぼれだった
いつもドジみ 肥満めはまる
鼻つまみ着き
何をとっても かなうはずない
哀れん まうよ

マックス お前はいつも だらしないぜ
見れやてるよ
じつに一人の女も迷かし
あわてまくって
タイガー お前がわかに うつつをぬかす
女はごみんだ
二人 きれいやっぱり 跳めるのか
お前の為だ

タイガー 街の掃き溜め たむろしている
お前ら チンピラに
マックス 少しは 口のきき方がある
お前も刑事なら
タイガー 慢れる女が
マックス あいつは いいぜ
タイガー いたとは不思議だ
マックス めくるめくよな 夜を過ごして
愛しあうのさ

『センチメンタル』

センチメンタル ときめく この胸 感じて
春の訪れを 待つ鳥のように
さえする声が 耳に響いてる
素敵な人と出会い予感なのかしら
昨日までの私は 不安にくもった思いで
希望の星を 探してた
でも 今は 平気なの
春を出した花のように 色づく
幸せに満ちて 染まるわ 夢の色に
ああ 神様
私の幸運 繕さないで
兵隊の足音を 這させてほしいの
港で待つ軍隊は わめかいくのに
空に飛ぶ飛行機は そのまま止めておいて
だって これからなの 幸せつかむのは
お願い 待ってて それまで

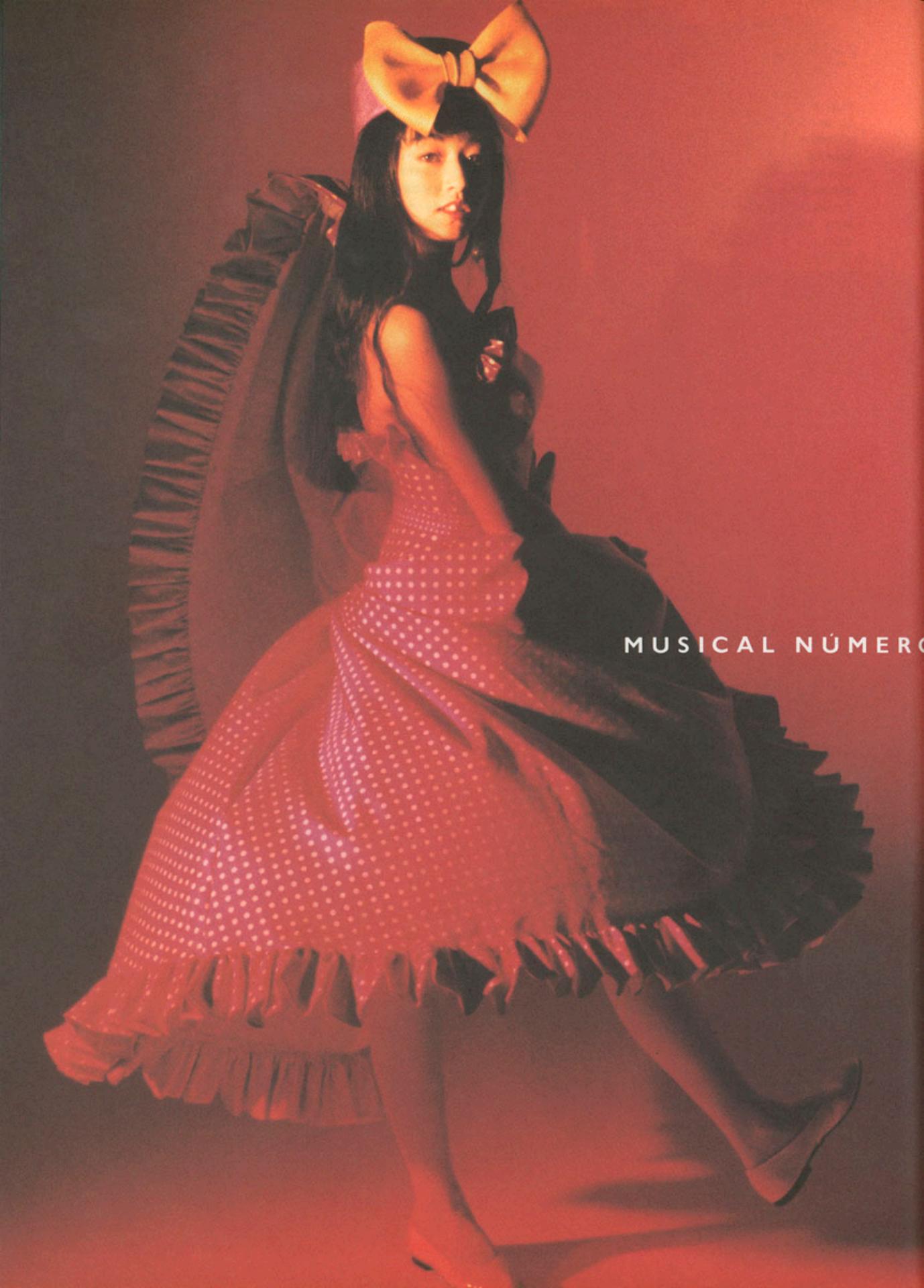
『愛で縛って』

さらって 今すぐ ここから連れて逃げて
あなたの手に 繋られたいの
わかって お願ひ
強がりもだめ もう言えない
あたしを子供のように眠らせて
いい男を相手に 夜を過ごす
毎日毎日 そぞろる日も来る日も
いつも あたしの あたしの心は あんたの事
寝も夜も切ない想いを
誰に打明ければいい
このまま胸に秘め おとぎはなしに寝え
そっと「しまい込んで
いつかは 忘れてしまう
さり そうね

『マランドロ——チンピラの唄』

夜のさわめどん 星の静けさの
盛り場でごめく 愛をもてあそぶ
金に飢えながら 愛に飢えた男
ひしめいひいる街 何くわぬ顔して
先達はむささ サツを握って
种なチンピラの歌を口づさみ

街は俺達の お屋敷代わりさ
种なチンピラは スラムじゅ紳士さ



MUSICAL NÚMERO

"マランドロ"ミュージカルナンバー

MUSICAL NUMBER	PLAYER	CHOREOGRAPHY
（第一幕）		
M 1 コバカーナの娘達	マルゴ+娼婦達	前田清実
M 2 弾圧賀歌	タイガー	ボビー吉野
M 3 僕とお前	マックス×タイガー	宮本亜門
M 4 センチメンタル	ルー	宮本亜門
M 5 愛を生きる	娼婦達	前田清実
M 6 LOVE GAME	マックス&ルー	宮本亜門
M 7 最後のブルース	ルー	宮本亜門
M 8 愛で縛って	マルゴ	宮本亜門
M 9 ビリヤード対決	マックス×サティロ	ボビー吉野
M10 もし、今はれちゃつたら	マルゴ+娼婦達	前田清実
M11 満たされぬ関係	マックス、マルゴ+全員	宮本亜門
（第二幕）		
M12 マランドロ—チンピラの唄	マックス+マックスの子分達	前田清実
M13 BOY	マックス×サティロ	前田清実
M14 LOVE GEME	マルゴ×ルー	宮本亜門
M15 今こそ誓える愛	タイガー&マルゴ	前田清実
M16 穴藏のタンゴ	マックス+ジェニ+マックスの子 分達	前田清実
M17 ああ無情	ヴィクトリア	
M18 リオ42	ライムンダ+群衆	宮本亜門
M19 僕はいく	マックス	宮本亜門
M20 愛のかげら	マックス&マルゴ	宮本亜門
M21 天使の舞	天使達(ダンスナンバー)	宮本亜門
M22 思惑通りの結婚式	全員	宮本亜門
（カーテンコール）		
M23 リオ42	全員	宮本亜門 & ボビー吉野

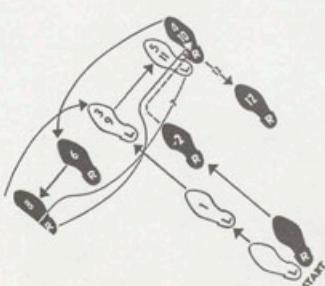
M9、M21……井上堯之作曲

M13……"Les rablablas les roublis" LES NEGRESSES VERTES

M15……"IL SUO TEMPO E NOI" IPOOH

他すべて、CHICO BUARQUE DE HOLLANDA

OPERA DO MALANDRO
BY CHICO BUARQUE DE HOLLANDA



「マンドロ」の音楽

中原仁

学美の日本へモア

奈良安國

『マンドロ』の原作者で音楽も作ったシコ・ブアルキは、現代のブラジリアン・ポピュラー・ミュージック(MPB)のリーダーのひとり。彼の音楽は、カリオカ(ブラジルのリオ・デ・ジャネイロっ子)独特的のイキでシャレた遊びごころを最もよく表わしている。中でもこの『マンドロ』の音楽は、サンバはもちろん、サンバに影響を与えたリオの下町生まれの音楽「ショーロ」、さらにジャズ、タンゴ、ラテンなども取り入れ、軽妙洒脱なエンターテインメント感覚がいっぱいだ。

今回の日本版舞台で使われる曲も、ほとんどがシコ・ブアルキ作曲。オリジナルの舞台版、そして映画版の両方から、ベスト・ナンバーが集まっている。歌詞もシコが作ったポルトガル語の原詩のニュアンスを巧みに日本語に置きかえてあるから、それぞれの詩にこめられた意味を感じとができると思う。

では、特にポイントとなる曲をいくつか紹介していこう。

まず第一幕のオープニングでマルゴが娼婦仲間連中と歌う「コバカバーナの娘達」。コバカバーナはリオ市の南部にある南米最大の海岸地域で、えんえん6キロにわたって白い砂浜が続く。ボサ・ノヴァが生まれた場所もここコバカバーナだった。一年中、大胆な水着姿の若者達でにぎわっているリゾート・ビーチだが、海岸通りをへだてた陸側には、ホテル、マンション、レストラン、バー、ライブハウス、ディスコ、そして娼婦がたまるキャバレーなどが立ち並んでいて、熱帯都市の甘くアブない魅力がいっぱいだ。“中国娘、アフリカ娘、イタリア娘、インド娘……”という歌詞を聞けば、この国がありとあらゆる人種が集まっている一大混血国家であることを感じとれるだろう。

マックスとタイガーがトイレの中で丁々発止とやりあう「俺とお前」が、マンドロのサンバの決定版。そもそもサンバの歌詞の中には、この曲のようになれば即興まじりで男同士が言いたいことを言いあう、といったスタイルのものがとても多い。お互いに自分のセリフのカッコ良さを競いながら、女性をモノにする、というワケだ。

さて、第二幕の一曲目「マンドロ——チンピラの唄」にご注目。マックスがライターを指で鳴らしながらリズムをとっているうち、それがいつの間にかサンバになる。実際、サンバのリズムの基本って、このぐらいざりげないものなのだ。ライターやマッチ箱、皿やフォーク、テーブルや椅子、なんだってバーカッションになってしまう。楽器なんかなくたって出来てしまう音楽、それがサンバだ。

フィナーレ近くでマックスとマルゴがデュエットする「愛のかけら」は、ブラジルでも大ヒットしたラヴ・ソング。なんたって男は女のために、女は男のために生きる国がブラジルだから、こみあげる愛の想いを伝えるのに最高の小道具が音楽。気の利いたラヴ・ソングのひとつも歌えないようでは、とうていラヴ・ゲームの主人公にはなれないのだ。おっと、歌抜きでも異性を誘惑する手段はある。それはダンス。順番が前後するけど、第一幕途中でルーが踊る「最後のブルース」が、その典型だ。

というわけで、シコ・ブアルキが作った『マンドロ』の音楽を聴いていると、サンバをはじめとするブラジリアン・ポピュラー・ミュージックの幅広い魅力はもちろん、ブラジル人のさまざまな気質といったものもうかがい知ることができる。ブラジル人というと「底抜けに明るくて楽天的なラテン民族」なんてイメージを抱く人も多いと思うけど、その背後にあるブラジル人の姿は涙もろくてセンチメンタルな人情家なのだ。そのあたりをこの『マンドロ』のストーリーと音楽から感じとってほしい。

それにつけても、シコ・ブアルキってホントにすごい奴だ!

マランドロの美学

国安真奈

今を去ること50年前、1940年代当時のブラジルの首都リオ・デ・ジャネイロには、きらびやかでお上品な上流社会と、雲上を覗き見つつも毎日をあくせく暮す一般庶民と、上の二つとの平等な交流はほとんど絶望的な底辺との間の区別が、あらゆる面で歴然と存在していた。それはほぼ「三つの社会」と言ってもよい構造で、当然それぞれに一番特徴的な文化なるものも見られたのだが、いつの世もいざこにおいても、どこかしら似通うのが常の上流と中流の文化はさておいて、興味深いのは底辺、特にチンピラやコソ泥、売春婦やジゴロ、曖昧宿の経営者や、町を徘徊する汚職警官などがうごめくサブワールドの文化である。

サブワールドの中心地、リオ市はラバと呼ばれる地区には、衛生のエの字も見当たらないゴチャゴチャしたアパートメントや、昼間でも何が飛び出してくるやら知れない薄暗かりが一杯で、夜ともなれば娼婦やポン引きのたむろする街角の一杯飲み屋に赤々と灯が点り、街全体が怪しい不夜城のようなその場所を目指して、一夜の快楽と幸運を手中に納めんとする有象無象の連中が集まっていた。しかもそこは、「警官」や「ジゴロ」や「コソ泥」のように食いぶちの決まっている“定職就労者”や、「経営者」や「娼婦」のような“資本家”に加えて、“マランドロ”と呼ばれる、何をやって生きているのかよく分からぬ不思議な人種も集い、一種独特な生活様式やイデオロギーをもって生活していた場所だった。

この不思議な人種は、サブワールドにおいてすらも“仕事”には就かない。強請やたかり、ちょっとした盗みなどは朝飯前。十八番の文句で女に貢がせ、詐欺を常習としまつとうな労働は避けて通りつつも、いつも爪先から頭の先まで一分の隙もないファッショニに身を包んでいる不可思議さ。派手な縞シャツ、純白の麻の上下。指に光る守護聖人の指輪、先尖りの二色の靴、そして頭にはカッコよくひしゃげたバナマ帽。個人至上主義をモットーに、他人の傘の下で露をしのごうとは決してせず、触るも危ない見るも魅惑的なその存在のオーラは、単なる装いのみならず、歩き方や喋り方にまで及ぶのである。外観からは、何のことはない、その辺のイキがってるチンピラ野郎と同じだ。しかしブラジル社会における“マランドロ”という言葉には、単に「チンピラ野郎」と日本語に訳してしまえない何かがある。それは、あまりにもかの社会に特有であるために、社会の諸規則、行動や役割、イデオロギーなどの集合体の、個人における反映として捉える他はないものなのだ。

より具体的に話そう。ブラジルに古くから伝わる物語に、典型的なマランドロを主人公にした「ペドロ・マラサルチスの冒険」という寓話がある。ペドロは大変貧乏な家の出で、ジョアンという実直勤勉な兄がいた。兄はある農園に雇われ、労働者と履行不可能な契約を結んで賃金を払わない下劣な農園主に、散々な目に遭わされて家に戻ってくる。ペドロはジョアンの哀れな姿に怒り狂って、農園主に復讐しようと自分も労働者として兄と同じ条件で雇われる。そこでペドロは非情な雇い主に様々な無理難題をふっかけられるが、いつも容易くその裏をかいて農園主をやっつける。雇用契約の条件は、労働者はどんな仕事でも拒否してはならず、雇い主も雇われ人も決して怒ってはならず、これに違反する者がいれば、首から背中に沿って一筋皮をはぐというものだった。そこでペドロは、「畑をきれいにしてこい」と草取りを命じられれば、作物共々すべて引っこ抜き、「牛舎を節のない幹で一杯にしろ」と命じられれば、バナナ園のバナナをすべて切り倒してしまうなど、雇用契約があるので怒ろうにも怒れない農園主に、あの手この手で逆襲した。ペドロを雇っているといつも一杯食わされてばかりなの



ENSAIO MANA KUNIYASU

で、農園主はどうとう労働者を殺してしまうことにする。近所に出没する泥棒に備えて武装して警備をしている間に、撃ち間違ったことにして葬り去ろうというのだが、ペドロは辛くも危機を察知し、農園主の女房を身代りにする。そして殺人をネタに農園主を脅し、沈黙の代金として巨額の金を巻き上げ、更に農園から立ち去ることを条件にした金ももらう。ペドロは金持になつて、意気揚々と家路についたのだった。

ペドロは兄が受けた仕打ちに怒りはするが、かといって農園主に何かを期待する訳ではなく、ただ文字どおり契約に従うだけだ。だがこうすることで、契約の「裏」で好機を得て、自分の不利な立場を有利に展開してしまう。ペドロには、法や社会の諸規則のような「非個人的」な関係も、「雇い主と雇われ人」といったより個人的な関係も存在しない。彼にあるのは、「彼の側の論理」だけなのである。しかも彼はずる賢く、自身の利益のために既存の諸規則を、破壊したり否定したりすることなく、ましてや問題にすることすらなく、うまい具合に利用するのだ。しかも、これが大事なことだが、ペドロは強盗でもなければ勇敢な男でもなく、聖人でもメシアでもない。当初は兄の復讐という大義名分にのつとつてはいるが、最後には卑劣漢の農園主に金を積まれて、簡単にこれを見逃してやる。モラルよりも金、なのだ。とてもヒーロー物のTV番組の主人公にはイタダケない。彼は、過去(兄の受けた仕打ち)にそれほど重きを置いていないし、未来とて「悪の是正」に象徴されるような具体的な何かを約束してくれる、「現在よりもよい場所」とは捉えていない。ペドロはもっと現実的で、状況的な男で、その時与えられた条件を利用して現状打破を図る。まさに行き当りばったりの、出たとこ勝負で。

だが、この「行き当りばったり」という性質こそが貴重なのだ。教養も家柄も富も権力も持たない底辺の人間が社会の強力な支配制度を前にした時、こけおどしのピカピカ衣裳と「出たとこ勝負」の不確実性とは、必要とするものや望むものを手に入れるためには不可欠なアイテムなのである。階級という壁ゆえに社会からはみ出てしまっているマンドロにとっては、労働力を商業的に取引するという普通の形での社会への参加は、割が合わず絶望的である以外のなものでもない。だから彼は、社会を風に乗った風船のように浮遊し、そこから自由に出入りし、果ては社会そのものをも超越してしまう。“マンドロ”とは、合法的で正当な手段をもってまともにぶつかって行つては相手にもしてくれない、融通のきかない「非個人的レベル」での不都合を補うために、より個人的なレベルで発達した一つの性質なのだ。

時は移り変わり、1990年のブラジル。ラバの街を徘徊する伊達男たちの影こそもう見られないが、“マンドロ”という言葉は、今でもしっかりと社會に根付いている。いや、むしろこの言葉は生活のあらゆる局面で使われるようになり、マンドロ的な性格を持つ人物は、社會のそこかしこに見付かると言つた方がよいかもしれない。不安定極まりない政治経済状況のもと、明日の我身も分からぬといった彼の地では、ある意味ですべての人々がマンドロ的でなければやり切れないとも言えるのだ。「規則というのは、常にちょこつと湾曲解釈するためのもの」という今のブラジル社會の大原則は、明日の生活への動力として、社會の隅々まで奥深く定着した“マンドロ”的性格に他ならない。マンドロは、やはりただのチンピラなんかじゃないのだ。

DOUBLE T



Toshihiko Tahara

Welcome To "SHOWTIME" Tonight You're In For A Hell Of A Treat
Jump Outta Your Seat, Up On Your Feet
With Enough Funk To Go Around For Your City In Your Town
Feelin' Funky Free As A Bird Up On The Mike It's Time Word
The Funky Mo Fo You've Been Waiting To Meet
Here Stands The King, DOUBLE T!

*CD:PCCA-00069 Including-Tax ¥2,800(Tax-Free¥2,718) *CT:PCTA-00050 Including-Tax ¥2,800(Tax-Free¥2,718)

*ダイバツ「シャレード」CFソング「君なじゅいられない」・フジTV系ドラマ「日本一のカン飛び男」主題歌/サントリー「シートル」CF曲「ジャングルJungle(London Mix)」他全10曲収録!

話題のフロモーションビデオ「ジャングルJungle」にメイキング・シーンを加えて絶賛発売中!

Single Video 「ジャングルJungle」Now On Sale!

*VHS:PCVP-10233+15minutes+Hi-Fi STEREO+Including-Tax ¥1,500(Tax-Free¥1,456)

DC
PONY CANYON

ビールにする？シードルにする？



新発売



サントリー・シードル
200ml 200円 希望小売価格(消費税込み)

リンゴがいいから
さっぱりしてる。

サントリー・シードル

サントリーの後やシードルの後。
お食事時にワイワイ飲むのもいいし、

恋人とうつとち乾杯する時も。

「ビールにしようか、シードルにしようか」
なんて迷うのも楽しいですね。

◎リンゴ100%のスーパークリンクリー。

新鮮なリンゴから水や糖分を一切加えずつくるから、
さっぱりした大人向けの味です。

◎ううの味からお選びください。

すっきり爽やかな『サントリー・シードル』
とやわらかい口当たりの『サントリー・シードル・スイート』、
2つの味が揃いました。

飲酒は20歳を過ぎてから
製造・販売 サントリー株式会社

洋行ス。

UC郎



海外26都市に「UCデスク」を新設。日本語でどうぞ。

UCデスクは海外での買う、食べる、見る、動くのインフォメーションや予約、トラブルの対応など、なんでもおまかせ。ニューヨーク、ホノルル、パリなど海外26都市。電話一本、日本語でビジネスやトラベルのお手伝いをいたします。あなたの熱い志、守りつづけるUCカードです。●お支払いに便利なUC海外リボ払い(分割)もあわせてご利用ください。

UCでお願いします。

UC UCカードグループ

- 第一勧銀カード
- 富士カード
- サイキンUCカード
- 太陽神戸三井・さくらカード
- Daiwa Card UC
- UC安田カード
- UC三井T.B.カード
- UC道銀カード
- ちば興銀UCカード
- 北越UCカード
- UC共立カード
- 北陸UCカード
- 福井UCカード
- 把握ワールドUCカード
- UC幸福カード
- UCセローソード
- UCミニカカード
- 九州UCカード
- さきたんUCカード
- UC第三カード
- UCLあわせカード
- UC福島カード
- UC熊本カード
- はうわくUCカード
- 京急カード
- ながさきUCカード
- 福岡UCカード
- UC労金カード
- UC長銀カード
- 山一UCカード
- カンガクUCカード
- 第一生命UCカード
- UC朝日ライフカード
- NTTカード“SCENE”
- 安田火災UCカード
- シティカード
- ユーシーカード

●お問い合わせは、UCグループ各社または下記へどうぞ 〒101 東京都千代田区鍛冶町1-10-7/UCサービスセンター
東京03-254-6751/大阪06-343-2331/名古屋052-583-1731/札幌011-271-2761/仙台022-265-0421/福岡092-713-1134



*写真のカードは広告用イメージカードです。

真珠色の時間。

白蝶貝、黒蝶貝を文字盤にあしらった
海からの贈り物。

MIKIMOTOが、パールの母貝や真珠を用いて創り出した
気品あふれるリストウォッチ&ブレスレットウォッチ。
腕もとで優雅な時を刻みます。



MIKIMOTO
International

写真上から:白蝶貝リストウォッチ NNS-5 ¥82,000 黒蝶貝リストウォッチ NNS-8 ¥82,000
ブレスレットウォッチ NNS-4P ¥180,000

ミキモトインターナショナル ギフトブティック

東京都中央区銀座2-4-12 Tel. STORE 03-562-2929 OFFICE 03-562-2475



今年も田原俊彦を見逃してはいけない

小野 緑

ここ数年、巷ではちょっとした“田原俊彦ブーム”である。寝たい男、いい男、好きな男、理想の男……などなど女性誌の企画するランキングでは、ことごとく上位にランクされ、あの「教師びんびん物語」の徳川龍之介先生役以来、老若男女を問わず、ファンの数がぐっと増えた。デビュー11年目にして、堂々とトップを闊歩している姿は、まさにスターそのものだ。“トレンド”だと“ブーム”なんて言葉では片付けられない底力。目移りしやすい世間の目を、デビュー以来引き付けたまま、いつの間にか、時代をも、自分に引き寄せてしまった彼の凄さの秘密はそこにある。

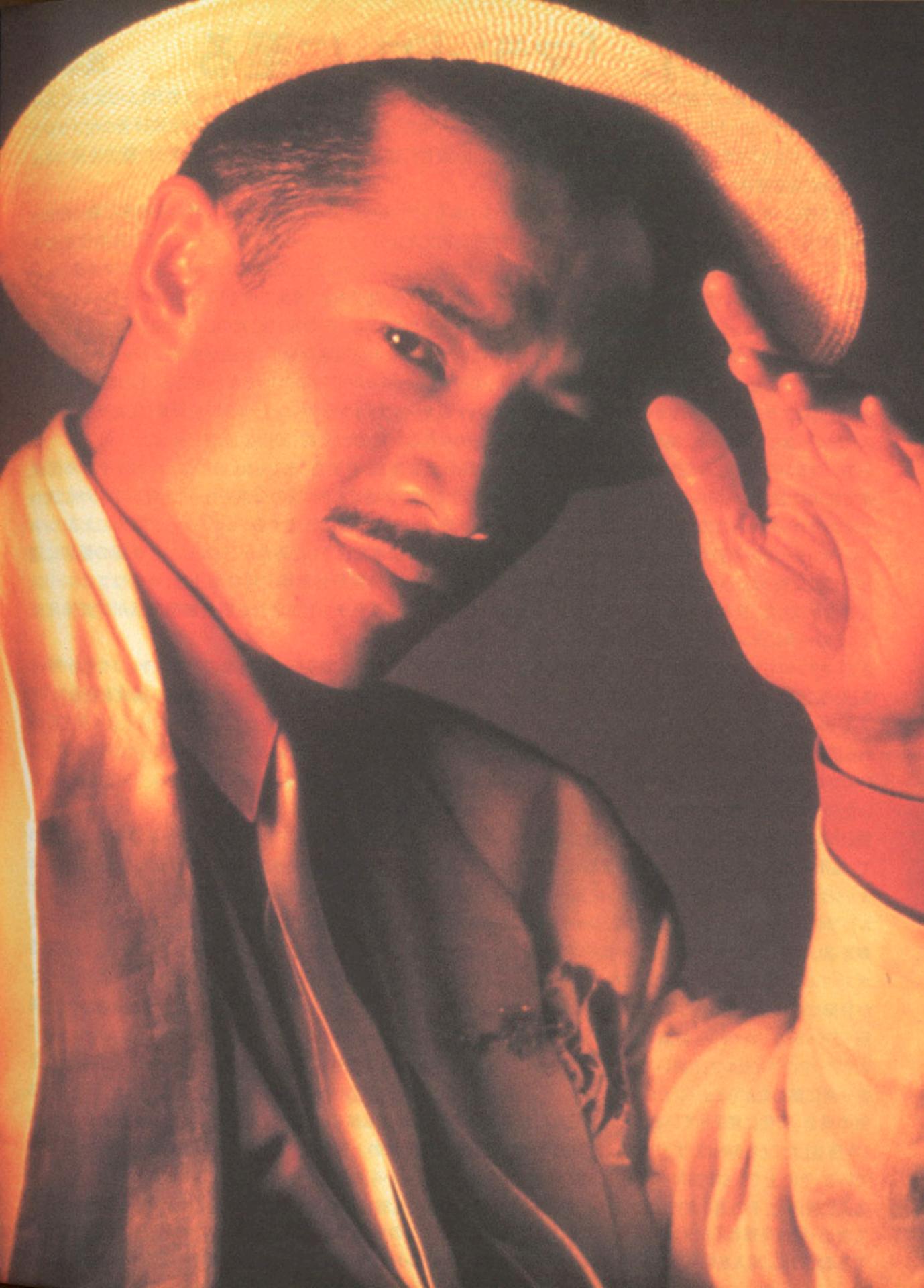
その底力の基、それは、とことん本気で勝負する仕事に対する姿勢と、自然体であろうとする心の強さと、着実にマイペースを保つ持続力、そして、11年やってきたという確かなキャリアだ。見せかけとか威かし、ハッタリとは無縁の、まさしく正統派。あくまでも正攻法の彼の潔さに太刀打ちできる奴は、そういうもんじゃない。

例えば、彼のダンス。テクニックだけで言ったら、彼より高度な技をこなすプロはたくさんいる。しかし、ひとたびカメラの前や、ステージの上に立ったときの、うむを言わせぬ存在感や、とにかく見せる、魅了するという点では、誰も田原俊彦に勝てやしない。最近のヒット曲「ジャングル Jungle」でも、本場の黒人ダンサーを従えて踊る彼の姿は、引けを取るどころか、ますます堂々たるものだった。画面からはみ出しそうなあの気迫と、見る者を圧倒する、いきいきとした目の輝き。近頃では、自分自身踊ることを楽しんでいるような余裕さえ感じられる。あのダンスは田原俊彦そのものだ。「自分らしく踊りたい」……控え目に聞こえるけれど、実はいちばん大切な事を、しっかりと見つめて来たからこそ、今の彼がある。着実とはそういうことなのだ。

芝居に関してもそうだ。アイドル時代は、どちらかというと、ナイーブな悲劇のヒーロー的役柄が多かった彼だが、三枚目役に正面から挑戦して、見事に演技の幅を広げてみせた。しかしそれは、アイドルとして二枚目田原俊彦を、その時々迷わずには全力でやってきた歴史と自信があってこそなのだ。成功も失敗も、やって来たことは決して無駄にしない。それらがみんな彼の血となり肉となって、彼を男っぽくし、味になり、深みになる。3年前に初めてミュージカル「A C B～恋の片道切符～」に主演したときは、歌、踊り、芝居すべてにおける実力をを見せつけただけでなく、座長として、舞台全体を引っ張っていく器の大きさまで身につけてしまった。これほど華やかな場にありながら、自分を磨くということに対しても、彼はあくまで着実なのである。

田原俊彦……今、日本でいちばんセクシーで魅力的な29歳。確かに、天性の輝き、天性の強運を彼は持っている。しかし、彼は決して天才ではない。失敗すれば自分に腹をたて、負けければ人一倍悔しそうに唇をかみしめる。可笑しければ、大声をあげて笑う。そんな人間的な男が、堂々と走り続ける様は、私達の心を捉えて離さない。

90年代は、本物の時代だという。際物や、まがい物は、どんどん淘汰され、まっすぐに光りを放っている本物が残る。だから……彼にとっての勝負は、これからなのだ。そして、そんな事はとっくに見抜いている彼は、この夏、着実さに加えて、大胆さを身に付け始めた。それも、緻密な大胆さである。『マランドロ』への挑戦が、その第一歩であることは、言うまでもない。どこまで本物になるか、答えは30代の彼の生き様の中に隠されている。だからこそ、20代最後の大躍進振りを、うかうかと見逃すわけにはいかないのだ。



宮本亜門、「マンドロ」に至る

風早美樹

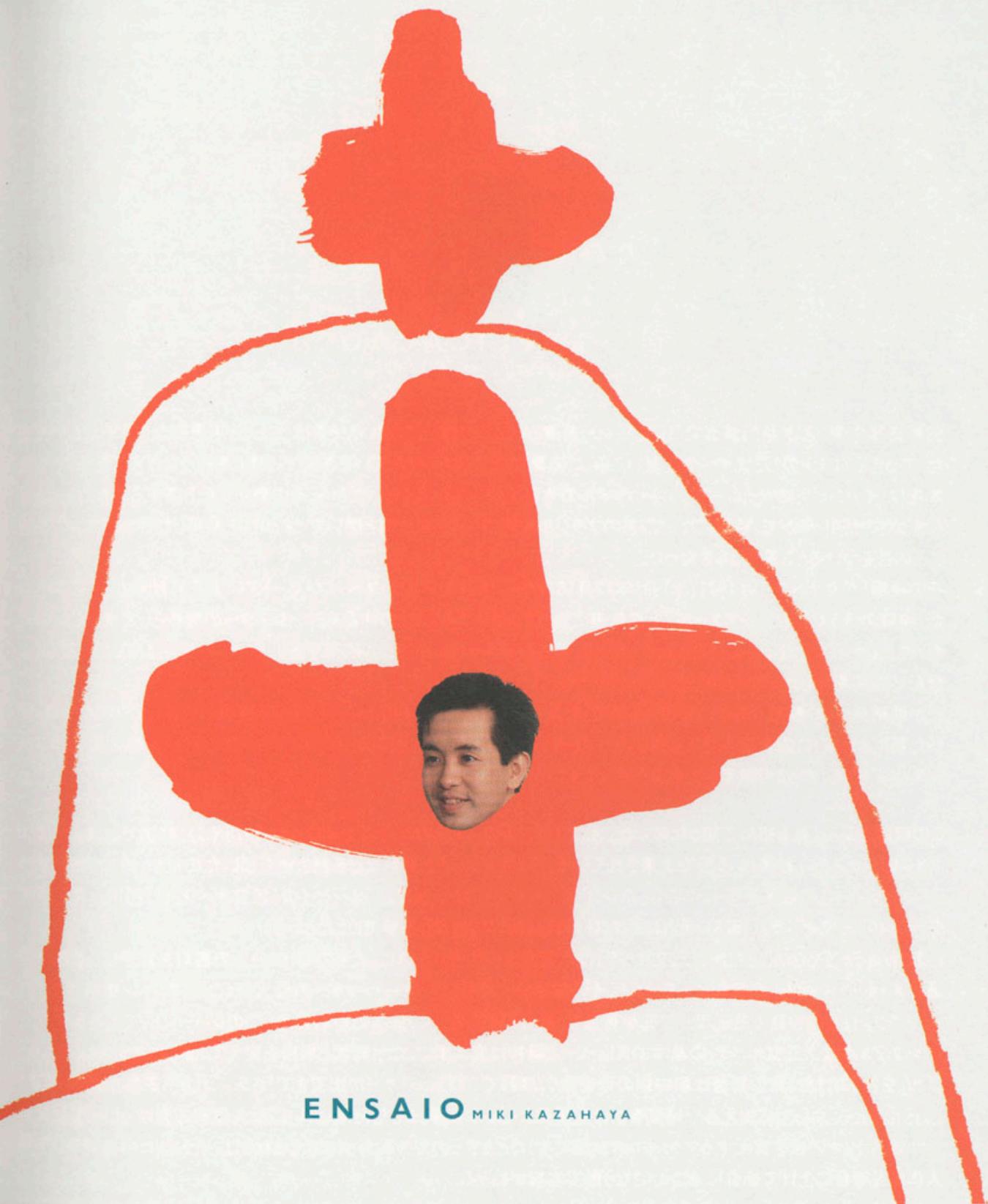
セクシなダンスを伴って世界中に急速な拡かりを見せつつあるランバーダをはじめ、サンバ、タンゴ等烈しいリズムで人々を酔わせるラテンビートが、「三文オペラ」のエネルギーッシュな、大衆のしたたかな生きさまを描くドラマと溶け合ったブラジアン・ミュージカル「マンドロ」は音楽監督に井上堯之、演出・振付に宮本亜門を据えて、これまでと異った魅力を持つミュージカルになる期待が大きい。

ところで夥しい数のブロードウェイ、ウエストエンドのミュージカルでラテンものは極めて数が少ない。舞台を南米に取ったヒット作品で思い出されるのはアルゼンチン大統領夫人を主人公にしたロイド・ウェッパーの「エヴィータ」である。'30年代初めラテン・ブームが起り、ルンバが大流行した。コール・ポーターがミュージカル「ジュビリー」の中にカリブ海に浮かぶマルティニーグ島のリズムに基づいた「ビギン・ザ・ビギン」を作ったのもほぼその時期である。戦後では'50年代ハロルド・アレンが二つのカリビアン・ミュージカルを作曲した。一つはハイチに材を求めた'54年の「花の館」(娼家のこと)、他はその名もずばりの'57年の「ジャマイカ」、前者にはバール・ベイリー、後者にリナ・ホーン、共に有名な歌手、女優が主演し「ジャマイカ」は500回を超すヒットとなった。ここ10年では「ラ・マンチャの男」の作曲家ミッチ・リー、「79年の「サラヴァ」がある。その舞台は「マンドロ」同様ブラジルである。リオの西北部にある古都バハナのカーニヴァルからカーニヴァルまでを背景にしたラヴ・ロマンス、グードーなどを採り入れ、褐色のダンサーも登場してローカル色豊かだったが、約150回の公演で終った。

一方、「マンドロ」の原作「三文オペラ」はあまりにもよく知られた音楽劇。今更言うまでもないがブレヒト=ヴァイルの代表作で初演は'28年、ベルリンだが忽ちに大ヒットしてその年だけで50の劇場で4,000回の公演を行ったと言う。アメリカに渡つてオフ・ブロードウェイで'54年、'55年併せて2,700回以上続演した。'76年オフに君臨するジョセフ・バップ製作によるリンク・センターでの改訂版も知られ、最近人気歌手を起用し日本の資本を投下した舞台が行われたが、新聞の酷評に遭つて短期に終つた。バップは'85年、N.Y.の夏のイベント、セントラル公園野外劇場で再び取上げ、今度はペルトリコ人俳優が演じた。日本でも盛んに青年座が再三上演し、また今年4月黒色テントが舞台を明治初期の品川に置換えた上、その一角にテントを張ったのは耳新しい。

さて「マンドロ」が注目を浴びている一つの理由は宮本亜門の演出・振付にありそうだ。新進の制作スタッフで客が呼べるということは、日本のミュージカル界では大へん珍しい。'87年4月、築地のブティスト・ホール初演の、作・構成も兼ねた「アイ・ガット・マーマン」はこれまでにない構想に基づいた100%エンターテインメントのミュージカル・ヴァラエティ、よくぞと思われるほど豊富に集めた題材を自由自在に味付けし、国産のショーとは信じ難いほど洒落れた舞台になった。何かの間違いでプログラムに監修として名を連ねた私は幾人の記者、評論家諸氏に「これはオフ・ブロードウェイのどこで上演されていたのですか?」と尋ねられたものである。

彼はダンディな父君、SKD出身の今は亡き母君の間に生れ、幼児の頃からアステア映画を見ながら銀座界隈で育つて、玉川大学演劇部に進んだ。プロ・デビューは'78年暮、その秋開場した博品館劇場の「シーソー」だが、プログラムに「ミュージカルを通して自分を見つけたい」と述べている。海外作品では他に'82年「ジブシー」、「83年「シカゴ」(シアター・アブル)、「84年「ボーア・フレンド」等に登場、シャープな動き、確かなテクニックが次第に注目を集めようになつた。これらの仕事を通して良き協力者大場公之(今回の訳・作詞者)を知り、また「シカゴ」で振付に来日したジーン・フトとは、傾倒するボブ・フォッシの高弟とあって大いに気が合つたらしく。その間彼はダンス・スタジオを開いて後進と共にレッスンに励んだが次第に振付を目差し、'85年には「ラヴ・コール」(原題「ベルズ・アー・リンギング」芸術座)を担当した。その翌々年が前記「アイ・ガット・マーマン」初演であり、ショー・ストッパー・シリーズは「ソング・ア・リトル」、「イッピ・ビン・ヴァイル」、最近の「アステア・バイ・マイセルフ」と続いて企画、出演者の選択にも抜群の冴えを見せ、いま日本中のショー・ビジネス製作者の目を一身に集めながらミュージカル、オペラ、コンサート等多方面の舞台を忙しく手がけ豊かな感性と才能を花開かせている。彼の場合、天性に恵まれていることはもちろんが基礎的勉強の努力も高く評価したい。海外にも度々赴き、ロンドンに約1年滞在したことがあれば、アメリカでは地方の小劇場に出かけて名作の上演を見るなど、万事謙虚に本場の歩みを学んでいる。その上で5、6年前N.Y.を去る時、「暫くは来ません。これから35歳まで国内の仕事に専念し、バリバリ働く」とある人に告げた、その通り実行しているのだから凄い。今度の舞台でも彼は尊敬するボブ・フォッシ、マイケル・ベネットに倣つて演出・振付を兼ねるがダンス場面が大事なこの種のミュージカルの場合は当人の力量分だけ効果を高めることは確かであるだけに、30人を数えるダンサーの激しい動きが多い「マンドロ」の楽しさを一層高めてくれるに違いない。



ENSAIO MIKI KAZAHAYA

小藤田

千栄子

EXPLICAÇÃO

CHIEKO KOTODA

田原俊彦主演、宮本亜門演出で「三文オペラ」を演るらしいと、噂として聞いたときは、ちょっと不思議な気がしたものだった。てっきりブレヒトの「三文オペラ」と思いこみ、この気鋭の二人が、なんでいまさらという感じを持ったからである。でも宮本氏は「イッヒ・ビン・ヴァイル」で、クルト・ヴァイルの生涯を描いているくらいだから、その繋がりで上演するのかななどとも思ったのだが、やがて、映画になった、あのブラジル映画の「三文オペラ」と聞いて、すっきりと納得した。同時に、すごいところに目をつけるとも思ったものだった。

その映画「三文オペラ・リオ1941」は1988年12月16日から、渋谷のバルコ、スペース・パート3で、お正月映画として公開された。映画のほうではミニ・シアターが、上昇気運に乗っていたところで、この作品もミニ・シアターの秀作として登場したのだが、残念ながら大きなヒットにはならなかった。ほとんど馴染みのないブラジル映画であり、知っている人は誰も出てこない、なんてことも影響したのかも知れない。

だが映画自体は、斬新なおかつ新鮮なもので、私たちファンは、久しぶりのミュージカル映画を大いに楽しんだのだった。聞いた話によれば、この映画を、とても気に入ってしまったのが今回の池田道彦プロデューサーで、氏は、空席の目立つスペース・パート3で、すっかり魅了され上演を考えたという。

この映画を見て、私も初めて知ったのだが、元はブラジルの、舞台のミュージカルだった。1978年7月初演で、リオ・デ・ジャネイロのジナスチコ劇場という所で上演されている。今回いろいろと資料などを読ませて頂いたのだが、元の舞台「オペラ・ド・マランドロ」の台本を作り、作曲もしたシコ・ブルキ・ジ・オランダは、ジョン・ゲイの「乞食オペラ」(1728年)、ブレヒト=ヴァイルの「三文オペラ」(1928)、それにバブストの映画版(1932)などを参考にしたという。

いまさら言うまでもないことだが、「三文オペラ」は、「乞食オペラ」をベースにしたもので、ロンドンの裏町を背景に、盗賊王の通称メッキー・メッサー、乞食のビーチャムと、その娘ボリー、それにメッキー・メッサーの愛人ジェニー、ロンドン警察のタイガー・ブラウンなどの物語である。テーマ曲が有名で、社会風刺もきつく、日本の新劇のオハコのレパートリーでもある。

シコ・ブルキは、「三文オペラ」の基本的ストーリーと精神は変えずに、だが時代と場所を変えて、新しいブラジルン・ミュージカルを作りあげた。元の舞台は劇中劇の形を取り、序幕でプロデューサーが出てきて「さあ、これから芝居が始まります」という形をとる。ついでに加えると「時間をかけて根気よく脚本を探しました結果、ついに新人作家の素晴らしい作品を見つけました。リオの夜を支配するマランドロの物語です」などと言うのである。さらに加えるならば、マランドロの格好をした新人作家を舞台に上げて紹介し、彼がいざなう形で本編が始まる。

シコ・ブルキは、60年代半ばのボサ・ノヴァ時代に、シンガー・ソングライターとしてデビューした人だが、政治的意識もきわめて高かったと言われている。軍事政権のころは、検閲を逃れてイタリアに亡命していたこともある。そういう人なので、このミュージカルにも政治色が濃い。

ブレヒトから ブラジル ・ミュージカルへ

映画版「三文オペラ・リオ1941」は、またちょっと違う作り方をしている。監督はルイ・ゲーラといって、日本ではガルシア=マルケス原作「エレンティア」で知られている人だ。映画版の特徴は、一言でいえばアメリカ志向、ハリウッド志向の作品で、監督が、いかにもハリウッド好きであることがわかる。最初のほうで町の映画館が出てきて、主役のマロンドロが、しっかりと映画を見ていたりするのだ。しかも出てくると映画館のおじさんが「来週は MGM のミュージカルだよ」なんて言うのである。監督に言わせると、1941年はブラジルにハリウッド・ミュージカルが入ってきた年なのだそうで、それはアメリカ文化が、ヨーロッパ文化を押しのけた年でもあったという。監督のそんな意識が映画全体にあふれ、ハリウッド・ミュージカルへのあこがれを示しつつも、そこは南米の国、ナンバーの見せ方が、ひときわ熱っぽく、こういうところが「ブラジルなのだなあと思わせるものがあった。

今回上演の台本は、元の舞台と映画版をミックスし、新たな日本ヴァージョンとも言えるものである。台本を読ませて頂いた限りにおいては、元の舞台にあったブラジルならではの政治色を抜き、映画版の華やかさは充分に取り入れ、なおかつ若々しくなっている。人間関係がすつきりとし、明快でありながら凝った構成に感心した。ショー・アップされているところも多い。ミュージカル新時代に向かっての、気鋭の台本という感じだが、これを書いたのが新人の第一作と聞いて驚いてしまった。多田誠・25歳。

台本にも感心したけれど、25歳の新人作家に、天下の日生劇場の台本を任せる、この度胸にも感嘆した。ここ2、3年の間に、日本のミュージカル地図は、大きく塗り替えられてきたが、時代はもう、ここまで来てしまったのかという思いもある。そこであせって多田氏に会わせて頂いた。

ホントに若い。東京深川生まれで、子供のころから芝居好き。学校では作・演出・主演で演劇部を仕切っていたらしい。初めて見たミュージカルは四季「ジーザス・クライスト=スーパースター」の初演。小学生のときだった。シネ・ミュージカルはオードリー・ヘプバーンの「パリの恋人」。もちろんリバイバルのときだ。独協大学法学部を卒業し、宮本企画に入った。もちろん「アイ・ガット・マーマン」感嘆組である。宮本企画では、これまで宣伝や制作を担当してきた。

今回の台本執筆は、宮本亞門のお名指しさうだが、亞門氏は、顔のわりには厳しい人なので、何回くらい書き直しを命じられたと聞いてみたら「うーん」と一生懸命、指折り数えていた。結局、十回くらい書き直しをしたとか。それにしても、第一作が日生劇場とはすごいですねえと向けると「日生劇場って、いちばん好きな劇場なんです。もう舞い上がってしまって」と言っていたが、それはそうでしょうねえ。

将来への夢としては、ミュージカルに限らず、ストレート・プレイをも含めた作・演出だそうだが、「舞台を見て下さった方の人生に、なんらかの形でかかわることが出来るというか、人生の出会いを書けるような作家になりたい」とのこと。宮本企画の二人目のアーチストとして、大きな将来を期待したい。



「ブラジルのエッセンス」

佐藤由美(ラティーナ編集部)

「色」

リオの海岸沿い……波模様のモザイクに彩られた歩道にはオレンジ、椰子の実を売る店がたち並ぶ。浜辺には色とりどりの原色の超ビキニを吊るしたビーチバラソル。そして砂浜をさらに鮮やかにしてくれるのがモレーナ(褐色の肌をした混血娘)の肢体、辛うじてその肌にまつわりついているビキニ。惜し気もなく披露されるその鮮やかな自然の美に魅了される観光客の何と多いことよ! アマゾンの森林には、確かに世界を驚愕させる色どりが存在する。しかしリオの街には、視覚を刺激してやまない肉体の「色」が永遠に満ち満ちているのだ。まるでアマゾンの鳥たちのように、リオのお姉さんたちはセンス良く極彩色の衣をまとっている。

「時間」

ブラジルの「時」は妙に居心地がいい。とりわけリオの日常は、セカセカした都会人の発想転換には最適。明日できることは今日はしない、というのが理想だけれど……ま、しかしあのインフレにうなされた生活では、現在は本当にそんなことをいたら生き延びられない。買い物を明日に延ばしたら、米だって豆だって価格がつり上がってしまう。のんびりしているようでも、この国で生き抜くにはすばしつこさが必要だ。要領の良さ、それがカリオカ(リオっ子)の得意技だ。カリオカの処世術は天下一品。「マランドロ」もそのひとつの典型的な血を引いている存在なのだ。そして今のインフレ下のリオで、マランドロは実に生き延びにくいわけだ。

COR, ODOR, RITMO

YUMI SATO

「熱とリズム」

ブラジルの熱っぽさを体感したかつたら、やっぱりカーニバルかサッカーに触れるのが手っ取り早い。年に一度のカーニバル・シーズンが到来すると、したい人々が高揚してゆく気分が伝わってくる。カーニバルのパレードで最高潮に達するための準備を見届けているだけで、それは興奮するものだ。サンバが街頭に溢れるのもこの時だ。その年のチームごとのテーマ曲がラジオからガンガン流され、人気曲はリオじゅうの人間が歌詞を覚えてしまうほどになる。同じくサッカー（ブラジルではフットボールと呼ぶ）にもサンバのリズム楽器が暗躍する。応援にサンバはつきものなのだ。その熱狂の声援とリズムの渦は信じ難い。ワールドカップ中継を見た人なら、ブラジル応援団の凄さがお分かりだろう！

「男と女の会話」

ブラジルにはあふれんばかりのジョークが存在する。「ピアーダ」と称する小咄はブラジル人のセンスの証明ともなるらしく、みなそのひねり具合を競うのだ。「バケラール」と呼ばれるナンパ術の巧みさも、男にとっては必需品らしい。齒の浮くような誉め言葉も、日本にないほど豊富だ。その一方で男は「女はオレンジのようなもの。どの街角でも手に入る」などと見栄を張ったり、女は「男は乗り合いバスのよう。一台出て行ってもまたすぐ次が来る」などと平氣で笑えるのだ。その言葉を駆使した見事な男女関係には、まったく頭が下がる。どうです、真似できますか？

アキ エ アゴーラ

小野 緑

ブラジルといえば、誰でも真っ先に思い浮かべるのが、リオのカーニバルとサンバのリズムだろう。あの、情熱的で自由で陽気でエнергичな祭りは、そのまま、ブラジルの人々の生活であり、生き方なのだという。

ブラジルの人々がよく口にする言葉に“アキ エ アゴーラ”というのがあるそうだ。意味は「今、ここに」。今、この瞬間を大切にという彼らの生き方そのものを、これほど簡潔に表現したものはない。過去の栄光をついつい振り返り、将来のあるいは事ばかり気にしてしまう日本人には、憧れることはあっても、なかなか理解しきれない生き方なのではないだろうか？

“アキ エ アゴーラ”に生きる彼らは、自分をとことん解放し、本能のまま、心のままに毎日を生きているという。相手がどう思うか、自分がどう思われるかなんてことは気にしないで、あくまでも、その時々の気持ちをストレートに表現してしまう。なにしろ「君は素敵だ」「好きだ」なんてせりふのやりとりが、初対面同士でも、平然と交わされるというのだから。

バスの運転手は、自分の気に入った女性客がいると、運転経路に無くても、彼女の行きたい場所の近くまで、平気でバスで送ってしまうということだって、笑い話でなく、まぎれもない事実だ。だからと言って、時間通りにバスが来なくて、待てる客は怒らないといふんだから、時間さえも、彼らの“今を楽しむ気持ち”を缚ることはできないというわけだ。自分で決めた時間という枠にはめられてしまうことが多い私達には、ちょっとばかり耳の痛い話である。仕事は朝早くから始め、夕方にはさつさと切り上げて、あとは自分が楽しむフリータイム。明日も仕事があるからなんて野暮なこと言わずに、時間を忘れて遊ぶという彼ら。24時間戦えるか？ ではなく、24時間楽しめるか？ ということこそ、彼らの人生のテーマなのである。

こんな話もある。ある時、日本人の男性がプールサイドにいたら、10歳ぐらいの地元の女の子が隣にやって来て、いろいろなポーズをとって、彼にモーションをかけ始めた。ところが、彼の方は、何だろうこの子!?と、一向に気が付かないでいたため、最後には、その子にプールの水をひっかけられたうえ、「どうしてあたしを見ないのよ！」と、怒られたというのである。自分の思うままに感情を表現し、自分をアピールするパワー……“アキ エ アゴーラ”は、子供の時からしっかりと彼らの中に息づいているらしい。

しかし、何をするにも、自分の感覚を感じ、感じたまま素直に生きて行くということは、いちばん自然で、いちばん簡単に見えて、実は、とてもパワーのいることなのではないかと思う。人間なもの、傷つくことだって、落ち込むことだって、壁にぶち当たることだってあるはずだ。日本人は、昔から、それらをじつと耐え忍ぶことを美德としてきた。また、時間をかけて、ゆっくりと傷を癒していくという手もある。けれど、“アキ エ アゴーラ”！ 彼らには、今、この時こそすべて。ものすごい瞬発力、マイナスをプラスに変えていく力がなければ、とてもそんな生き方できやしない。彼らの明るさの裏にある、底知れぬ力強さの、なんと素晴らしいこと！ なんと逞しいこと！

こんなイキでパワフルなブラジル気質が生んだヒーロー、それが“マランドロ”だ。危なっかしくて、ヤバイ商売に手を出しながらも、今、この時を、思うままに堂々と肩で風を切って歩く奴。90年代、アキ エ アゴーラなマランドロが、熱く、新しい。

(ブラジル事情取材協力／クルーベ・ド・ブラジル主宰・塙本恭子氏)

ENJOY BRASIL

中原 仁

GUIA JIN NAKAHARA

●音楽

最近はブラジルの音楽もだいぶ浸透てきて、日本盤、輸入盤とも以前に比べて手に入れやすくなってきた。ひとくちにブラジル音楽といっても、シコ・ブアルキ、ミルトン・ナシメント、ジャヴァン、イヴァン・リンスなどのコンテンポラリー・ポップス、サンバ、ボサ・ノヴァ、そして最近何かと話題のランバーダなど、いろんな種類があってとても幅広い。だからレコード店のブラジル音楽コーナーに行っても、どれを選んでいいかわからないこともあるかもしれない。そこでおススメしたいのが、No.1 FMステーションのJ-WAVEで毎週日曜日の夕方5時30分から放送している番組『サウージ・サウダージ』。サウージ(健康、乾杯の合図)、サウダージ(なつかしさ、あこがれといったブラジル人特有の感情)、このふたつのポルトガル語をキーワードに、毎週新旧いろんなブラジル音楽をリラックスして楽しめる番組だ。

また、この夏、あのランバーダを生んだブラジル・バイア出身の二大トップ・スター、ジルベルト・ジルとカエターノ・ヴェローゾが来日する。東京公演はジルが7月下旬、カエターノが8月上旬。多彩なブラジルのリズムやメロディにアフリカ音楽やロック、ファンクの要素もミックスした、とびきりのワールド・ミュージックを聴かせてくれるふたり。ちなみにどちらもシコ・ブアルキの大親友だ。ぜひ体験しておきたいコンサート。

●映画

『マンドロ』の映画版『三文オペラ——リオ1941』(もちろんシコ・ブアルキ原作)は、ビデオ、LDで手に入れることができる。この舞台を見て気に入ったら、ぜひ、ブラジル版オリジナルもチェックしよう。

あと、忘れちゃいけない名作が『黒いオルフェ』。リオのカーニヴァルを舞台にしたふたりの男女の悲しい恋物語で、今から30年以上前に作られ1959年カンヌ映画祭でグランプリを取った。監督はフランス人だが、リオの庶民の生活とそこに根づいている音楽サンバの魅力がタップリ味わえる。

●食べる、飲む

ブラジル料理のメインは肉。ブラジルには「シュハスカリ亞」という肉料理のフルコースを味わえるレストランがある。庶民の料理の代表がフェジョアーダ。黒豆と肉の臓物をグツグツ、トロトロと煮込み、ライスにかけて食べるスタミナ料理だ。ブラジルでも米は主食。

一方、ブラジルの酒の代表がサトウキビから採ったスピリット「ビンガ」。まあ、ブラジル版焼酎のようなもので、グラスにレモンかライムのブツ切りを入れてつぶし、サトウとビンガを入れて飲む「カイヒリニヤ」というカクテルがすこぶる美味。

こういったブラジルの料理とお酒を東京で楽しみたい人のためのオススメ・レストランはまず浜松町にある「アマゾン・クラブ」。もうアマゾンのジャングルの雰囲気を再現した店内の空間もグッドだ。また、青山3丁目の「ブラッサ・オンゼ」^{しようちゅう}ではブラジル音楽のライブやブラジル直送ビデオも楽しめ、ダンス・フローもある。ブラジルから来日したアーティストも必ず立ち寄るスポットだ。

●スポーツ

ブラジルのスポーツといえばもちろんサッカー。ワールド・カップの試合中はブラジル中の機能がすべてストップしてみんなテレビにかかりつく。スタンドでのサンバのリズムに乗った応援も大フィーバー。8月6日にはリオの人気No.1チーム「フラメンゴ」がスペインのチームと戦うビッグ・ゲームが東京ドームで行なわれる。また、F1のトップ・ドライバー、アイルトン・セナやネルソン・ピケはブラジルの国民的ヒーロー。鈴鹿のF1日本GPに行く時は、ブラジル国旗をお忘れなく!

ワールドミニで
未来を創る!


キミへ、
ファーストカー。



Photo:ボゼ

さりげなく、スマートに。

クルマとは、そんなつきあいがいい。

コンパクトカーをリードし、クオリティに磨きをかけてきたシャレード。

トレンディな「情感のあるフォルム」と、シックなカラーコーディネート。

信頼性で定評のエンジン・バリエーション。

そして、なによりも乗りこなしやすいボディサイズ。

これが私のクルマだと、実感できるクルマ。

それが、ファーストカー。それが、シャレード。

(乗るたびに、新しい)
シャレード

●シートベルト、きちんと締めて、いい運転。

花王



夏は、デオドラント。

汗、汗、汗、のこの季節には、
デオドラントタイプのビオレJがいいみたい。
洗いながら全身の気になるニオイを防いで
素肌がまるごと気持ちいい。
やさしいMAPの泡だから、1日何度も使えるのもいい。
夏だもの、高岡、
ニヤキッ! と素肌もキメるよ。

ニヤキッ!



ビオレU

デオドラント

全身洗浄料

シトラスマント

フレッシュフルーツ

各180ml/各300円+9円(税) 300ml/各500円+15円(税) 780ml/希望小売価格1,200円(税抜)

医薬部外品

快適笑顔が好きです。

フマキラー

電子蚊とりはベーブ。
ゆえに、30日電子蚊とりも
ベーブリキッド。



暮らしを快適にする小さな働きもの。



効き目が広がる3つの穴
ベーブ・マット

香りかすかな
ベーブ・マット・f

さっとまきとる
ベーブ・自動巻

ベーブの30日電子蚊とり
ベーブ・リキッド

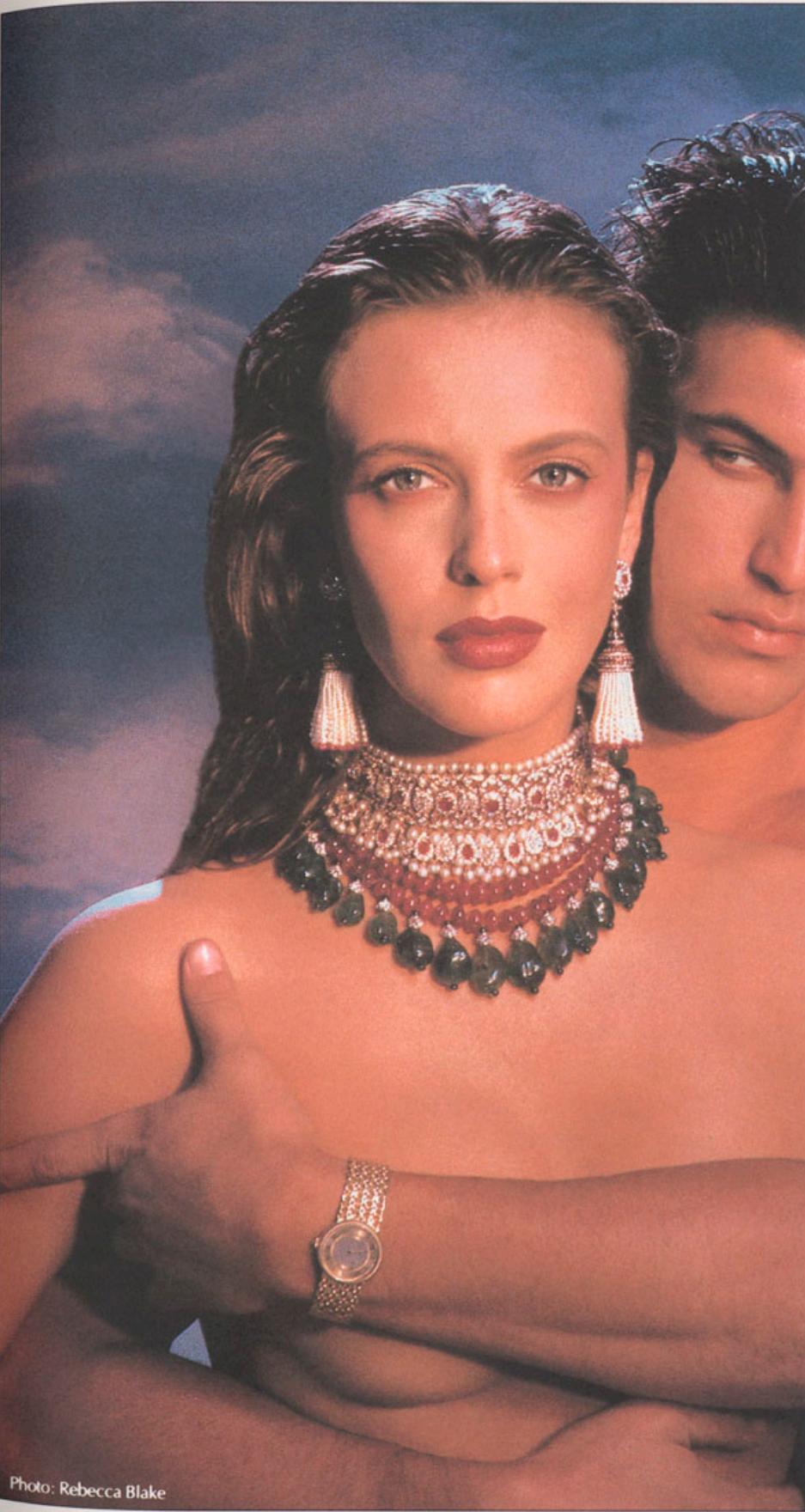
使用上の注意をよく読んでお使いください。

効果長持ち、約30日間取りかえいらず！

薬剤をセットするだけで、1日12時間(約4.5畳～8畳)で約30日間使うことができます。さらに、殺虫効果の高い新しい薬剤d-d-T80ープラレリン(ビレスロイド系)を配合。しかも効率のよい2重揮散孔により殺虫成分を部屋のすみずみまで行きわたらせます。



フマキラー株式会社 • 本店・東京支店 = 〒101 東京都千代田区神田美倉町11番地 ☎ (03) 252-5941
支店 = 名古屋・大阪・広島・福岡 • 営業所 = 札幌・仙台・浦和・横浜・静岡・金沢・岡山



WALTHAM

IS
WORTH
WAITING
FOR.

W
WALTHAM
ウォルサム

18 Carat



REF 92950-414.12P

美しい世界に求めて
HEIWADO & CO.
 平和堂貿易株式会社
東京都港区東麻布1-8 TEL.03(586)1811

五つ星 ☆☆☆☆☆ レストラン“マランドロ”

小野 緑

『マランドロ』の稽古場には、まるで小粋なレストランの厨房に入り込んでしまったような、ときめきと活気があった。材料それが旬の香りを放ちながら、溶け合い、お互いの味を引き出し合って、メインディッシュ『マランドロ』が出来上がっていく様は、見ているだけでワクワクしてくる感じだ。それもそのはず。料理は、ほとんど素材で決まるというが、ここでの選りすぐられた素材達は、皆、とびっきり新鮮で生きがいいときてる。

主役マックスは、ビジュアル、実力共に、日本のミュージカル・シーンを背負う男、田原俊彦。映画で観て以来、マックスをやるのは俺だと心に決めていたというだけあって、ヒゲもクラーク・ケーブルぱりに伸ばして、気合は充分だ。「ファッションと音楽がすごくイカシて、最高に艶っぽい作品だよ。チンピラ役は初めてだけど、危ない色っぽさみたいなものが出せたらいいなと思ってる」。ミュージカル特有の、節回しの難しい歌や、ハードなダンスの振り付けにもねをあげずに、夜遅くまで個人レッスンに取り組んでいる姿に、彼のこの作品に賭ける意気込みがうかがえた。

そんな主役と、全く違った風味で勝負しているのが、ロック・グループ「バービーボーイズ」のボーカルの杏子と、「子供ばんど」のボーカルでありギタリストでもある、うじきつよしだ。娼婦マルゴ役の杏子は、ミュージカルはもちろん、演技体験も初めて。「最初は、ロックやってんのにミュージカルなんてって言われるのが嫌で、お断りしてたんですけど、よく考えたら、これは違う畠の人達と接して勉強できるいいチャンスかなと思って……。こんな豪華なメンバーのなかで恥かけるのは、一生に二度とないかなって思います」なんて言いながらも、どうしてどうして誰にも引けを取らない大胆な演技ぶりだ。

うじきつよしは、映画「226」などで、役者としてもいい味を見せているが、ミュージカルはこれが初めてということで、なんと一週間ニューヨークに行って、ブロードウェイのミュージカルを観て来たという熱の入れよう。せりふに関して、毎回自分の意見を言いながら、自分なりのタイガーポー警部役を懸命に探ってる様子が印象的だった。「舞台っていうのは、どんどん自分の役を考えていけるから面白いよね。やるからには、プロとして完璧にやりたいよ」。この二人の、型にはまる事のないビートの効いたエネルギーが、稽古場の潤滑油になっているようだ。

出演者の中で最年少の高岡早紀は、稽古場の片隅にいても常に体を動かしたり、ステップの練習をしたりして、いつもピチヒチと弾んでる。「ルーの役って、あんまり私の経験したことのないものなんで、大変だなあって思ってます」と戸惑いながらも、この稽古中にあった修学旅行の旅先では、夜中も一人台本を開いて、せりふを覚えてたという熱心さ。バレエで鍛えた身のこなしも楽しみだ。

こういったフレッシュ組に対して、熟成した風味を漂わせているのが、ルーの父親オットー役の峰岸徹と、その妻、ヴィクトリア役の中島啓江だ。俳優座養成所、文学座を経たパリパリの演劇人の峰岸徹は、ミュージカル出演が昔からの夢だったと



ENSAIO MIDORI OONO

かで、実に楽しそう。「強烈な歌と、強烈な踊りがあると思って期待してたんだけど、残念ながら歌が一曲だけなんですよ……」と、力を持て余してる様子だが、これはペテランの余裕と見た。

歌って踊れる4オクターブのオペラ歌手、中島啓江の、温かくて説得力のある歌声は、稽古場でも、思わず聞き惚れてしまうほど。「私、泣き虫で、今度歌う曲なんて、聞いただけで泣いちゃったのね。でも、泣きながらでも、いい役にしたいです」と、すっかり母親役にのめり込んでいて、日に日に存在感を増していくようだ。

料理に忘れてはならない調味料やスパイス達も、ピリとよく効いている。生糀のミュージカル役者、川平慈英は、「ACB」でも田原俊彦と共に演しているので、息はぴったり。「常にポジティブに肯定的な芝居をしていきたいんだ」と、頼もしい一面を見せてている。

ドラマ「ふぞろいの林檎たち」でデビューした中島唱子は、ルーの友達のフィオレラ役。「舞台って、おもちゃみたいに仕掛けられてるものだと思うから、気持ち良く弾みたいです」と言う彼女。思いきりのいい演技は、稽古場でも弾んでいた。

田原俊彦のバックで踊っていた“のおちん”こと乃生佳之は、本業のうどん屋の仕事を休んでの出演だ。「歌以外にトシと共演するのは初めてだから、今回はすごく期待してるんですよね」と目を輝かせている。役どころも、マックスの一の子分ということで、二人のセリフの絶妙のやりとりが、なかなか面白いテンポを作り出している。

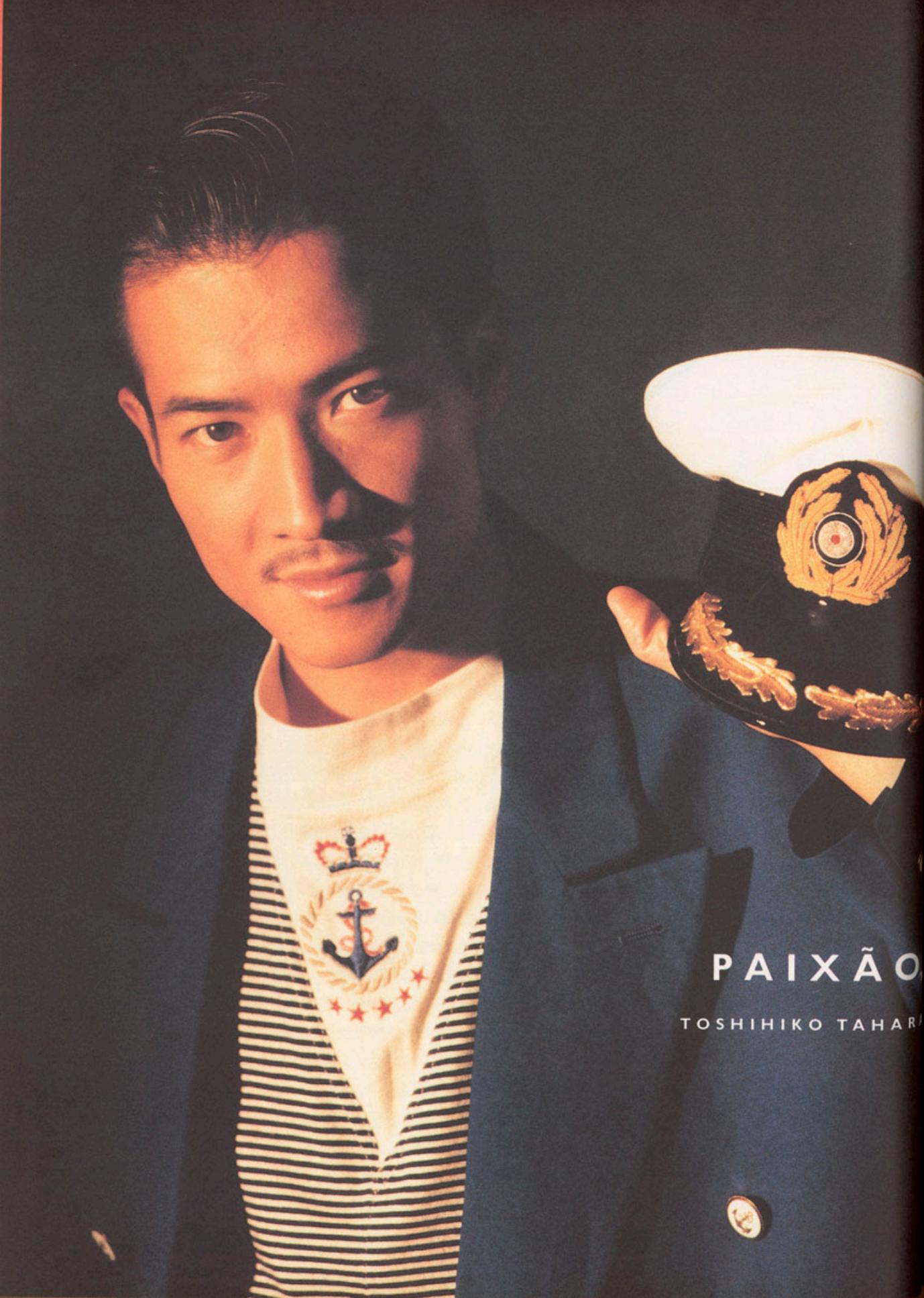
黒色テントの富田直美は、娼婦ライムンダ役。アドリブ的な動きが、とても生き生きしていて目を引いた。「これは大人のミュージカルだと思うので、やってて楽しめます」とは、なかなか頼もしい発言。

おかまのジェニを演じる池田成志は、小劇場では人気の俳優だ。大劇場出演はこれが初めてだが、「日常生活から、おかまに成り切れるように頑張ります」と、稽古場では、いつもハイヒールをはいたまでの奮闘ぶり。

もう一人、個性的な存在なのが、TVや映画で最近活躍中の金子研三だ。「テンション上げ過ぎて飛び出さないように注意したいと思います」と、稽古の段階から、翻訳剥き出しで張り切ってる姿が、見ていて気持ちいい。

みんながみんな異なる畠から集まった粒揃い。稽古に入る前、田原俊彦が「これから(稽古を含めて)二ヶ月、みんながファミリーになって頑張るんだ」と語っていたとおり、強烈な個性が、ぶつかったり、かみあったりして、稽古場には、緊張感とアットホームなムードが、絶妙のバランスでみなぎっていた。主演の田原俊彦がファミリーを引っ張り、フレッシュ組が起爆剤となり、ペテラン達がそれを包み込み、個性派がリズムを作る。

『マランドロ』の厨房は、すでに食欲をそそるいい匂いでいっぱいだ。つまみ食いはこのへんにしておこう。最高級の料理を、美味しく味わうためには、空腹も大切だから……。

A black and white photograph of a man with dark hair and a mustache, wearing a white t-shirt with a nautical emblem on the chest. He is looking directly at the camera. To his right, a sailor in a dark uniform and white cap holds a white sailor's hat with a gold anchor insignia. The background is dark.

PAIXÃO

TOSHIHIKO TAHARA

A dramatic black and white photograph of a woman dancing. She is wearing a vibrant, ruffled dress with a green and pink camouflage-like pattern. Her hair is dark and curly, flowing down her back. She is captured in a dynamic pose, with one arm raised and bent, and her head tilted back, eyes closed in a moment of intense expression. The lighting is low, creating strong shadows and highlights that emphasize her movement and the texture of her dress.

BRIHAR

KYOKO

A fashion advertisement featuring a woman standing against a solid red background. She is wearing a long, dark, flowing dress with a lace-trimmed collar and cuffs. The dress has a fitted waist with three prominent yellow buttons. The skirt is full and layered. She is also wearing black lace-trimmed stockings and black shoes. Her hair is dark and styled up. The lighting is dramatic, creating strong shadows on the right side of the image.

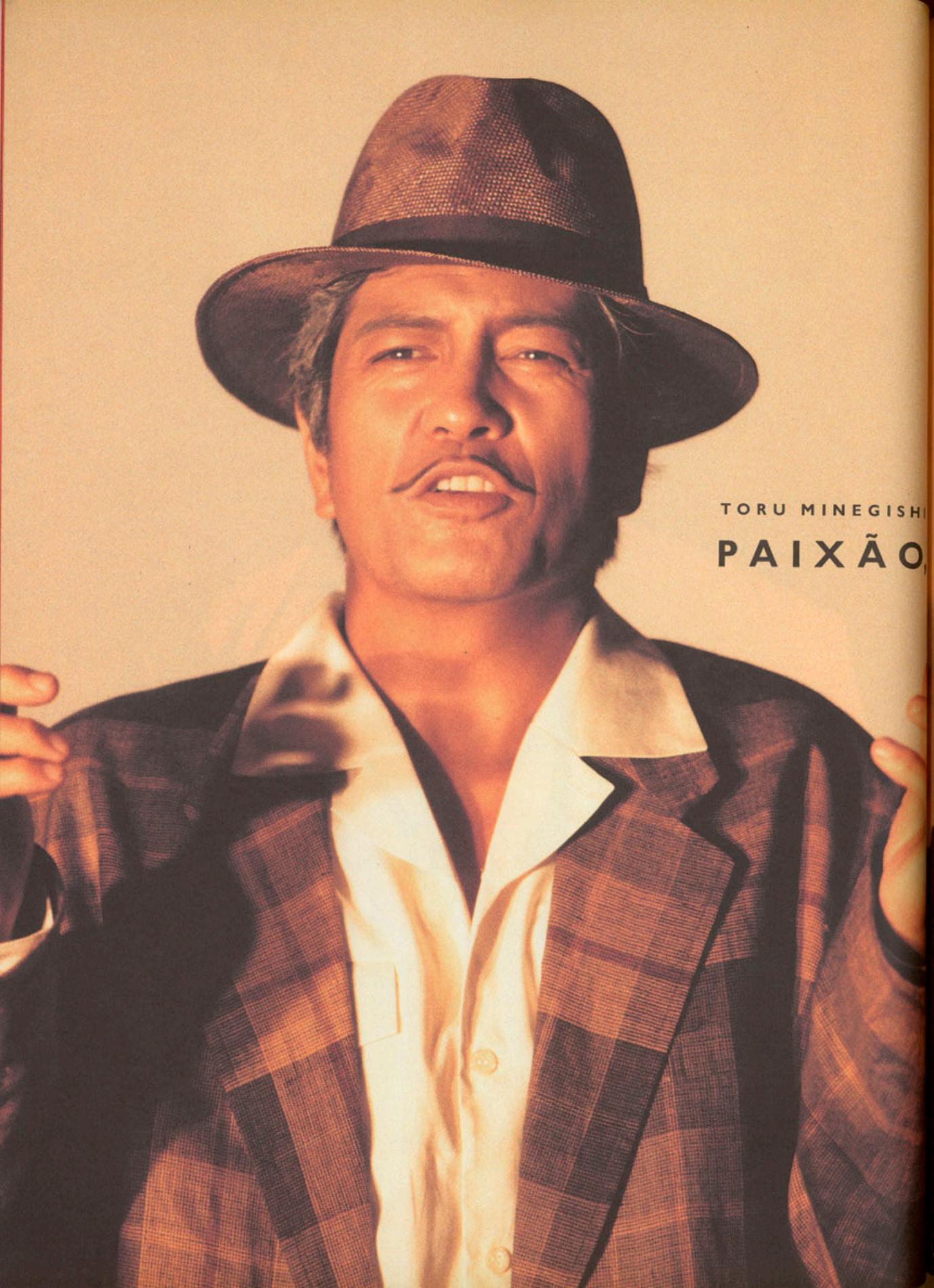
SAKI TAKAOKA

PAIXÃO

BRIHAR

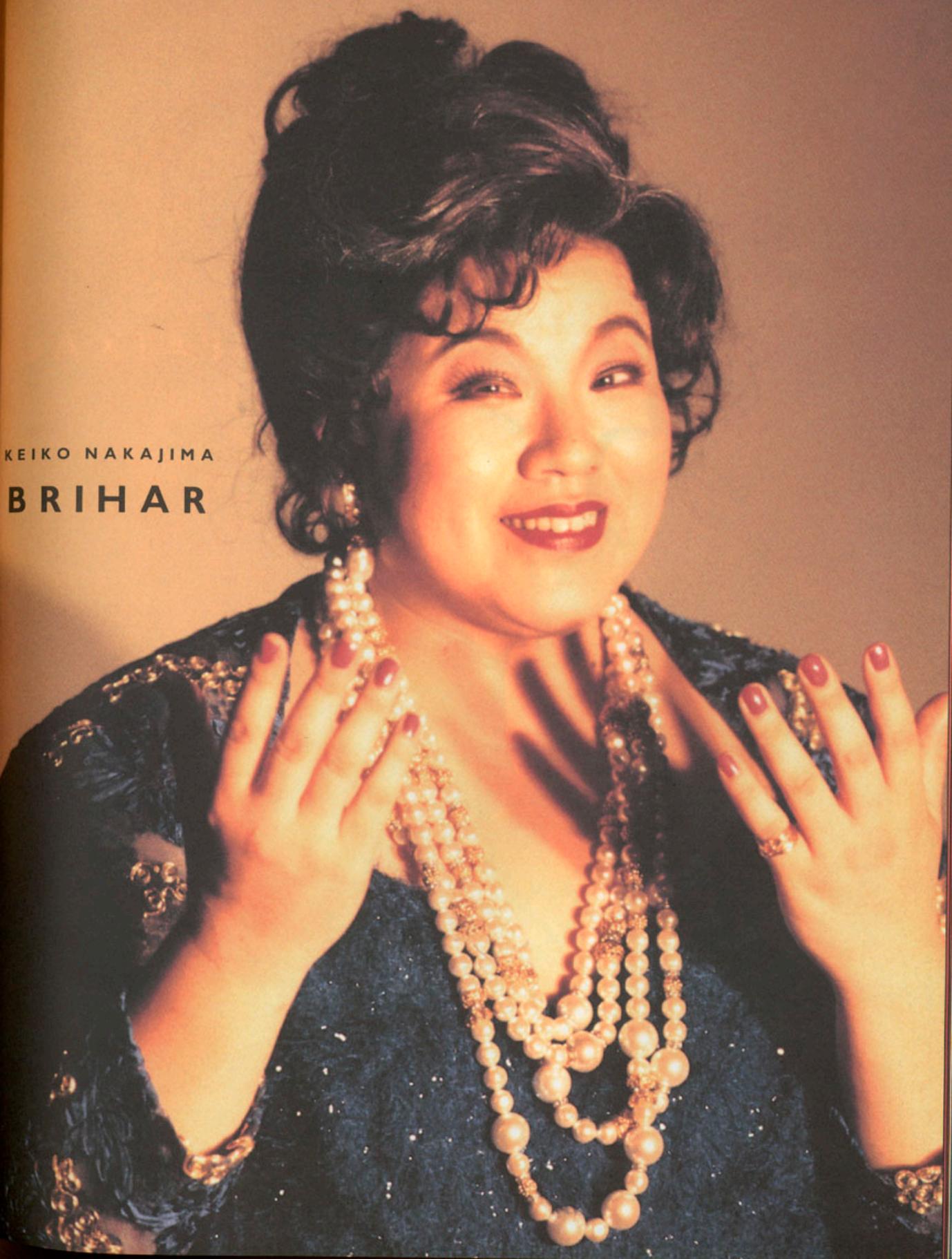
TUYOSHI UJIKI



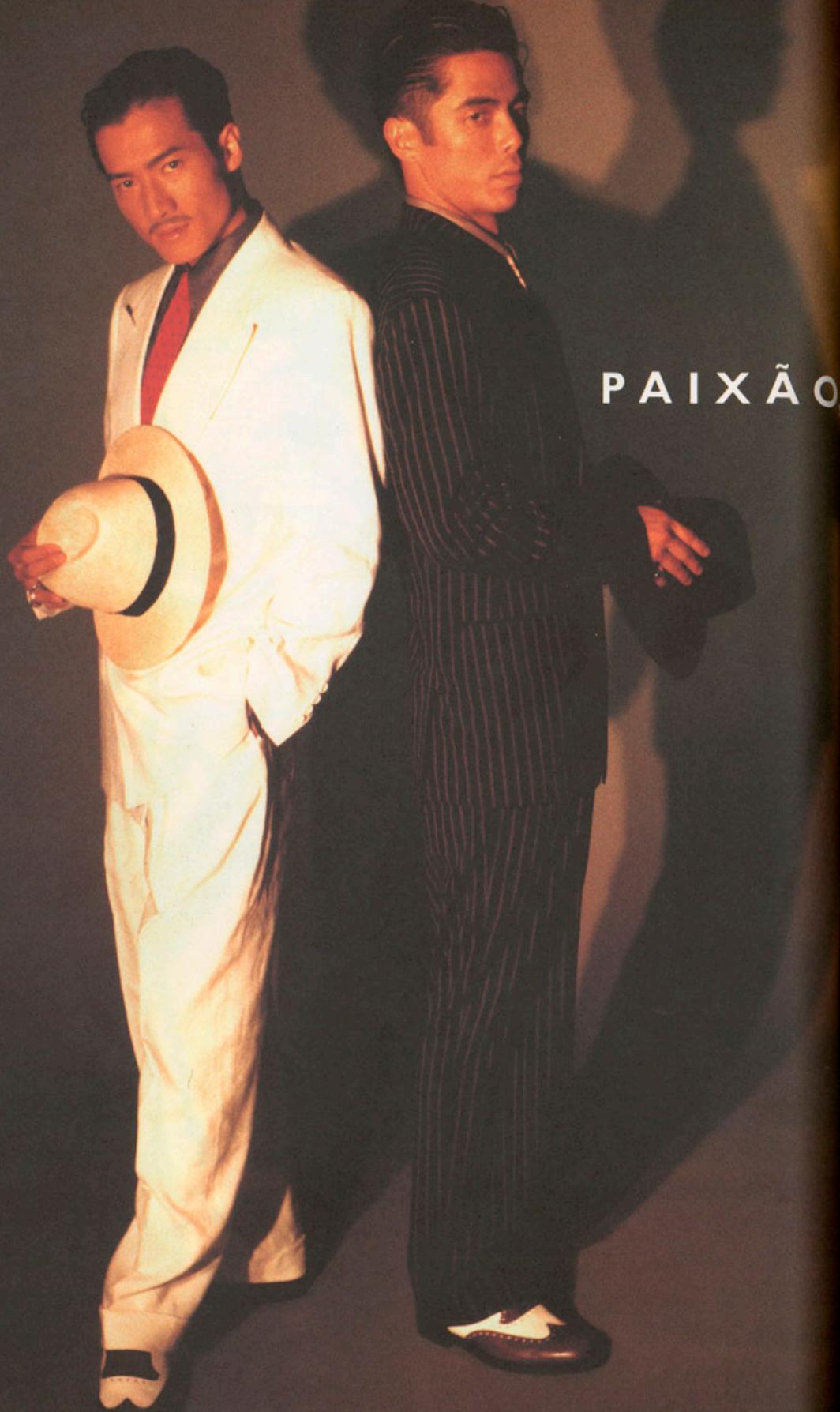
A color photograph of a man from the chest up. He has dark hair and a well-groomed mustache. He is wearing a dark brown fedora hat and a dark blue and white plaid blazer over a light-colored button-down shirt. He is looking directly at the camera with a slight smile. His hands are visible on either side of his shoulders, holding the lapels of his jacket.

TORU MINEGISHI
PAIXÃO

KEIKO NAKAJIMA
BRIHAR



© TOSHIHIKO TAHARA, TUYOSHI UJIKI



TOSHIHIKO TAHARA, KYOKO

BRIHAR





CC

TUYOSHI UJIKI, KYOKO
PAIXÃO, BRIHAR



PAIXÃO



JAY KABIRA, KENZO KANEKO

BRIHAR



JAY KABIRA, TOSHIHIKO TAHARA

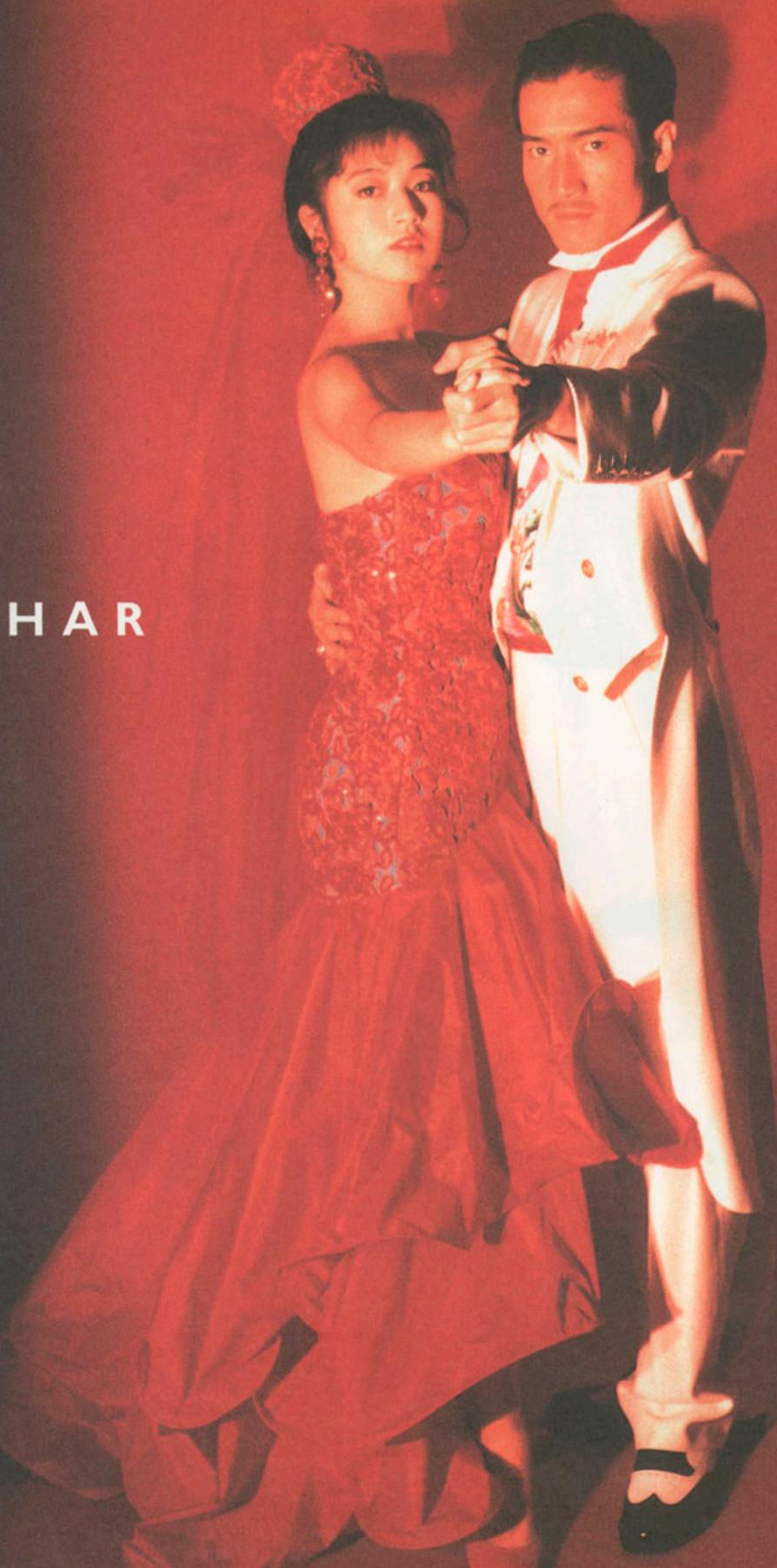
A photograph of two women posing together against a solid red background. The woman on the left has long, dark, curly hair and is wearing a black, sleeveless, ruffled top. The woman on the right has short, dark hair and is wearing a black halter-style top with a pink and white patterned skirt. She is also wearing large, dangling, multi-layered earrings.

PAIXÃO,



KYONO, NAOMI TOMITA

BRIHAR



SAKI TAKAOKA, TOSHIHIKO TAHARA



PAIXÃO, BRIHAR

TOSHIHIKO TAHARA, NARUSHI IKEDA



YOSHIYUKI NOH, TOSHIHIKO TAHARA





PAIXÃO, BRIHAR

SAKI TAKAOKA, SYOKO NAKAJIMA

SAKI TAKAOKA

TORU MINEGISHI

KEIKO NAKAJIMA.



治田謙

スタッフごとに愛さすり、面輝光らす伊達男。その名は治田の青さん。面魔持ちの老後者。ヨバ古賀 (脚)



加藤成夫



夏まゆみ



大島毅



ピートの効いたダンスを見てくれる人。
いつも英語を必ず事なく、
情熱的に踊りに取組んでいると思うよ。
(港永 誠)

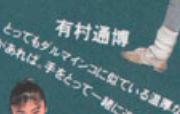


金澤由美子

顔が小さくて、スタイルはハッチー!
踊りに色糸を出した! つい由美子。
今度の姫崎役はイチャンズだね。
(江夏 誠)



あきみ様子



永久真実



美しい瞳、ドナドナラクのうなほしき魅力的な
マリちゃんはとてもかわいいです。舞の湯かな!(佐木 誠)
また、若い事があれば、手をつて一緒に逃げてくれる人です。(鷺本 勉)



江夏ルリ



飛田ほなみ

とにかく、かんぱり屋!! である。
ただただ、かんぱり屋!! である。
ひたすら、かんぱり屋!! である。
(本間 駿)



鷺本秀郎

古賀豊
鷺本がダンスリーダー古賀さん。愛称古賀二! 身体はコツが心はナイーブ。
鷺本と酒井のマッチマッチ!(鶴形 誠)



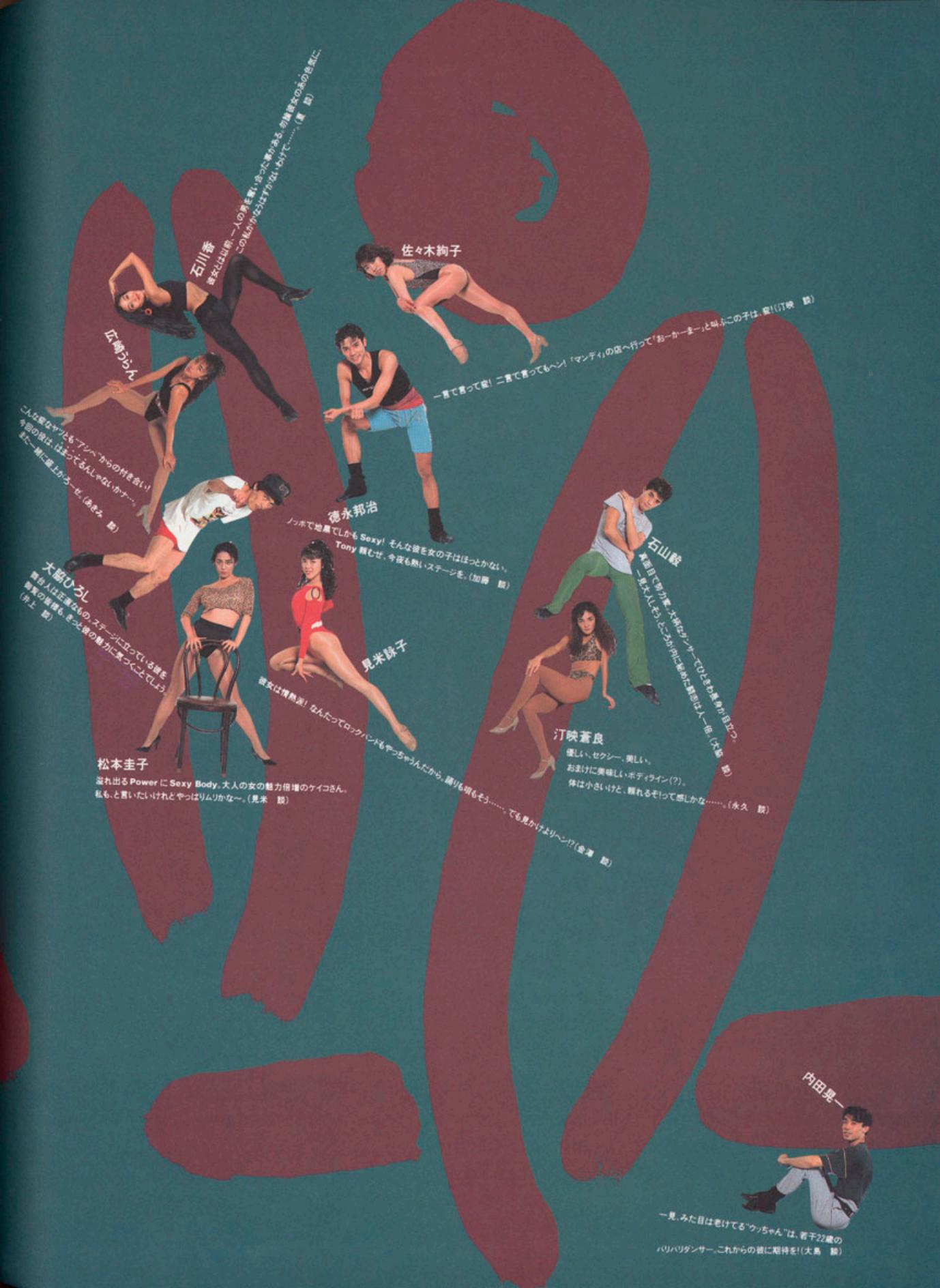
中山れん太
物静かに座っている姿に、「クマさん」みたいな優しさと温かさが感じられます。(鷺本 誠)



井上仁司

椎吉が辛くても苦くても、実腹一つ見せず? ガンバル鷺本...。いいステージを繰ってくれるでしょう。(石山 誠)

リハーサルではダンスキャブテンも務める、心優しき色のコバカハート野郎"シャンテ"様たア俺のことだあ!(石山 誠)



石川香

彼女は以前、一人の男を愛し、会って離れるがちではないが、ついで……。(浜崎 聰)

佐々木絢子

一言で言って史! 二言で言つてもヘン! 「マンディ」の店へ行って「おーかーまー」と叫ぶこの子は、史!(汀映 聰)

浜崎あゆみ

こんな豪華なヤツとも「アシハ」からの付き合い!
今回の宿は、はまつるんじゃないかな?
また一緒に寝上からせ。(あきな 聰)

大脇ひろし

舞台人は正確なもの。ステージに立っている様子
興奮の表情も、そこそこの魅力に惹つくことでしょう。

松本圭子

溢れ出るPowerにSexy Body。大人の女の魅力倍増のケイコさん。
私も、と言いたいけれどやっぱリムリかな~。(見米 聰)

徳永邦治

ノッホで地悪でしかもSexy! そんな彼を女の子はほっとかない。
Tony舞むせ、今夜も熱いステージを。(加藤 聰)

見米静子

彼女は情熱派! なんたってロックンロールやっちゃうんだから、踊りも歌もそ……。(浜崎 聰)

石山毅

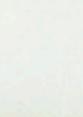
普段目で物力重視、大体はヨーヨーひとときは身体は人一倍。(大脇 聰)
「見たい」ところが何に限られてない。彼は人一倍。(大脇 聰)

汀映蒼良

優しい、セクシー、美しい。
おまけに美味しいボディライン(?)。
体は小さいけど、舞れるぞ!って感じかな……。(永久 聰)

内田晃一

一見、みた目は老けてる「ウチちゃん」は、若手22歳の
バリバリダンサー。これから彼に期待を!(大脇 聰)

指揮	井上堯之	
ピアノ	古田綾子	
ラテン・パーカッション	木村邦治	
パーカッション	内山暁一	
アコーディオン	横内信也	
トランペット	吉田憲司	
トランペット	鈴木徳司	
リード	ポブ斎藤	
リード	五十嵐正剛	
ギター	田島勝美	
ベース	永島 広	
ドラムス	有田 宏	
トロンボーン	近藤文雄	
ヴァイオリン	座間吉弘	
キーボード	石橋美穂	
	小林隆一	

宮本亜門(演出)

いつもエネルギー満々。ダンサー、振付師と歩んできた経歴を背景に活かしミュージカル、オペラ、ストレートプレイ etc. ジャンルを超えた作品がいつも話題を呼ぶ。今回も出席を確めるヒマもなく、稽古場でハワーを発揮した。

井上堯之(音楽監督、指揮)

この作品ですっかり、シコ・ブルキの音楽に魅せられたという。ミュージカル音楽は何本か手かけているが指揮は初めて。稽古場でもリハーサルを見守りながらも、いつも指揮棒を手にしていた。

甲斐正人(音楽助手)

音楽界のサラブレット。ミュージカルに生命をかけている。今回は作品を気に入り、是非参加したいと言って協力して下さった。おだやかでやさしい人。

多田 誠(脚本)

朝冠25歳! これがデビュー作である。自分の書いた脚本を身振り手振りで演じた姿が印象的。ジャスタンスを習い始めたと言ってたけれど……、踊る脚本家になる日は近い(?)。

大場公之(訳・作詞)

"はずかしい!"を連発しながらもデモテープの仮歌を全部歌ってくれた。どうもありがとう。でも、声が高いので女性パートの方が得意(?)。やさしい表情で大きくうなずく姿は回りの人をホッとさせる魅力がある。

前田清実(振付)

みなぎるエネルギー。頼もしい姐御。振りを説明する時のたとえがユニークで、演説語が続出。男振りのカッコ良さは天下一品。

ボビー吉野(振付)

おとなしい人たか、振付に入るとハワフルかつスピーティー。今回も男性キャストは筋肉痛に苦しんだ。新しい振りでは定評のボビーさん、「マラントロ」の仕上かりはいかに……。

和田平介(美術)

オペラ、ミュージカル等の舞台美術からコマーシャルフィルム、店舗デザインと幅広いジャンルの作品を手かけている。打合せでは、熱が入ってくると早口になり、相手の名前を連発するクセがある。今回は劇場の限界への挑戦との弁。

原田 保(照明)

今や、コンサート、ミュージカル、ストレートプレイとの世界でもひっぱりだこ。物静かだが、内に秘めたものは……、あるスタッフ曰く"どこへ行てもモデル!"のこと。

山中洋一(音響)

アメリカ、特にN.Y.が好きなせいか、作る音に都会的な香りがする。普段は物静かだが、江戸っ子気質でヘランメ工調になることがあるそう。

清川美保子(衣裳)

最近は雑誌等でウェディングのイメージが強いN.Y.、ロンドンでコストュームデザインを学び、コンサート、ミュージカル、コマーシャルと幅広く活躍中。今回、トータルでコーディネートしたいということで、帽子、くつ、アクセサリーも全て手かけた。

鴻 啓孝(ヘア・メイク)

その名通りひょうひょうとしている。亜門サンと組むのは「イッピ・ビン・ヴァイル」以来2回目。テカダンスなものが得意の彼女。今回はどんなフランを見せてくれるでしょうか。

坂本聖子(演出助手)

美術、衣裳、演出部と裏舞台は何でもこなすスーパーワーカー。若く見えるが、この世界は長い(この世界で彼女と仕事をした事のない人はモクリ)。演出助手は初めてとの事だが、皆、安心してまかせてしまった。お疲れ様!!

三沢洋史(歌唱指導)

いひつなリズム、三連符とシンコペーションに満ちたメロディー。激しさとけだるさの同居するサンバの世界は僕の心のもう一つの故郷です。でも同時に僕は感します。カーニバルの喧騒の真只中に白い亡靈達の微れる様を……。明るければ明るいほど悲しいラテン民族の魂の色を……。(本人談)

中條純子(稽古ピアノ)

「アイ・ガット・マーマン」では舞台に出ていたが、今回は裏方で頑張ってくれた。腫瘍炎になるのではと心配する程、長時間弾いてくれたバーの基は"ヤセの大食い"だからでしょうか。

深見信生(舞台監督)

一見、やさしくて、お人好いで、力持て、ままで、もの静かで、真面目……な様に見えたけど実は、そうじゃないみたい…と思う今日この頃です。

瀬崎将孝(演出部)

ブランド物で身をかためた彼の姿を見て振り向かない女の子はない程カッコマン。歩くアンテウス青年、実は思いつきりエッチです。御用心!!

野沢奈美(演出部)

稽古場では、深見＆瀬崎コンビにはさまれ、女性一人で頑張っていた奈美ちゃん。苦労も多いでしょうが、いつもおたやかで真面目に取り組んでいる様子は皆が認めるところ。

矢野二郎(音響オペレーター)

見た目は寝転ただか、中身はとっても繊細な人。たまに見せる女性っぽさは、シェニ顔負け。姿を見たい方はグランツサークルへどうぞ。

北森千晴(音響オペレーター)

小さいけれど、力持ち。笑顔が可愛い千晴ちゃんは皆のアイドル。最近、私生活が充実しているという噂は本当?

LATINA

MUSICA CONTEMPORANEA DEL MUNDO

GIL 1990 JAPAN TOUR

ジルベルト・ジル

アフロ=ブラジルが世界を揺るがす

ワールド・ミュージックの震源地、ランバーダのルーツ、バイーアからふたたび熱波到来!!

7月23日(月) 18:30 昭和女子大学人見記念講堂

7月24日(火) 18:30 中野サンプラザホール

8月11日(土) 21:00 青山 CAY(ほか全12ヶ所をツア―)

入場料金●A席¥5,000 B席¥4,500(税込)全席指定 絶賛前売中

お問合わせ●ラティーナ・コンサート部 ☎03-446-1225

世界の音楽最前線に独自の強力ネットワークを持つ唯一の月刊音楽誌

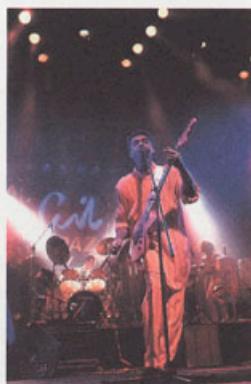
コンサート・プロデュース、CD・LP・ビデオの輸入等、ナマの音楽と直結するトータル・マガジン!!

月刊ラティーナ

定価●¥460(税込)毎月20日発売

〒150 東京都渋谷区恵比寿1-13-6

☎03-446-1225



鮮烈なラテン・ミュージカル

製作 大沼信之

この作品は今まで数多く上演してきた日本のミュージカルの中では、きわめて異彩を放つミュージカルになるものと思います。

原作を今世紀ドイツが生んだ傑作「三文オペラ」に振りながら、それを情熱の国、爆発するエネルギーをもったブラジルに世界を移し、官能的なラテンの音楽で塗り替えてすっかり様変りをさせた上で、さらに今日の日本、90年代の東京の感覚で洗い上げて仕立てた、一味違ったミュージカルです。

国際都市となった今の東京の感性が息づいたミュージカルとして、ブロードウェイやウェストエンドの作品とも違った楽しみ方をしていただければ幸いです。

演出をお願いした宮本亜門さんの狙いも実にそこにあるようで、今一番輝いている田原俊彦さんを主演に迎えて、どんな楽しさ溢れるミュージカルになるか、大いに期待していただきたいと思います。

どうかごゆっくりと、心ゆくまでお楽しみ下さい。

NOBUYUKI ONUMA

PRODUCER MICHIEHIKO IKEDA

今、南向きのミュージカル!

プロデューサー 池田道彦

渋谷の映画館だった。ヒマつぶしのサラリーマンらしき男と二組のアベック。広い場内には、5、6人の客しか居なかった。「オペラ・ド・マランドロ」、ブラジルの三文オペラを見ながら、私の胸は奇妙な興奮に包まれた。十数年前、ブラジルのミュージカル草創期に作られた舞台を映画化したこの作品は、決してブロードウェイにコピる事なく、しかし確実に自分達の情熱を注ぎ込んだ痛快な作品に仕上がっていた。このエネルギーだ!

ロンドンやブロードウェイをなぞるだけでなく自分達の情熱を伝えるためのミュージカルを、私も作ってみたいと思った。

宮本亜門がノった。絶好調の田原俊彦が、バービーボーイズの杏子が、そしてうじきが、早紀が、集まってくれた。私はこのメンバーで、あえてソフィスティケートされていない等身大の情熱むきだしの舞台を'90年東京に出現させてみたい。

日生劇場にお集まりの皆様、どうぞこの舞台の楽しさを存分に味わって下さい。そして、もしあの時の映画館で「オペラ・ド・マランドロ」を御覧になった方がいらしたら、私の先見の明を少しだけほめてやって下さい。スタッフ・キャスト・関係者の皆様ありがとうございます。また、この企画にご参同いただいた松竹株式会社に感謝します。



TOSHIHIKO TAHARA

KYOKO

TUYOSHI UJIKI

SAKI TAKAOKA

COMPANHEIRO

現在は稽古もたけなわで、これが幕が開いた時にはどんな形にまとまっているんだろうと外野は無責任に楽しんでおりますが(笑)。

うじき
いやあ、やる方は大変ですよ。逆にいろいろ見えてきて難しくなったというか。ただ僕のやるタイガーは役柄的にいつもマックスと対比しているわけでしょ。

田原 同じ土地で生まれ、ガキの頃からお互いを意識して成長してね。お互い憎んでるんだか愛してるんだかわかんないみたいな、不思議な間柄だものね。

うじき そう。マックスとタイガーは2人一組で一つの人格みたいなどころがあるって、両方の凸凹がうまく噛み合わさってるのか、ちょっとずつズレて見えるのか、それによってやり方、出し方が違うような気がするね。

杏子 ^{ほん} 傍から見ても、この2人の関係は面白い。今日だってうじきさんの方が派手なスーツで、座長がむしろ地味っぽかったり(笑)。お話の中でも、練習の時でもいい関係ですよ。

田原 何言ってるの、自分の方こそ、夕陽が落ちてくると突然ハイになっちゃうくせに(笑)。ほんと、おかしなヤツなんだから。

杏子 でもタイガーってやっぱり、どっかでマックスのこと、すごく好きでしょう?

うじき どうしてもついて行ってしまうんだよね、最終的にはね。警察なんかにいて、自分がイニシアチブを取りたいとずっと思ってるんだけど、結局はコントロールできずに、マックスと共に破滅の道に…。

田原 あとは舞台見てよ、なんてね(笑)。でも本当、この芝居って、男も女もいろんな人生が出てくるよね。俺達2人だって、大人になってからも子供の時のようにじやれ合ってるもんね、2人っきりの時は。底辺には男同士の目に見えない暗黙のうちの取引きとか、ごまかしとか、友情みたいなものが芽生えてるんだけど、マルゴという女がいて、新しい女、若いルーが出てくると、もう目茶苦茶(笑)。マックスって、もともとが優柔不断に生きてるからさ、俺も稽古しながらね、「どういう性格してんだ、こいつは」なんて(笑)。ただ、ラストがけっこう面白いと思う。それまで優柔不断ながらも自分の思い通りに生きてきたマックスが、コロッと死んじゃったりなんかして、「いくら何でもこれじゃ話は終わらないだろうな」と

思っていると…。

突然、天国から戻って来て(笑)。俺なんてマルゴとくつつくんだもんね。若いルーは大きいおなかになってるし。

杏子 私のマルゴなんて、「年増、年増」と言われっ放しですかね。ルーと比較されて(笑)。もう「ありがとうございます」ですよ。本当、更年期障害もすぐかな、なんて感じがしてしまうくらい(笑)。

田原 でも、マルゴとルーの女同士の対決も面白そうじゃない。新旧の(笑)。

うじき 演技がいつしか本気になってた、なんてね。んなことないか。

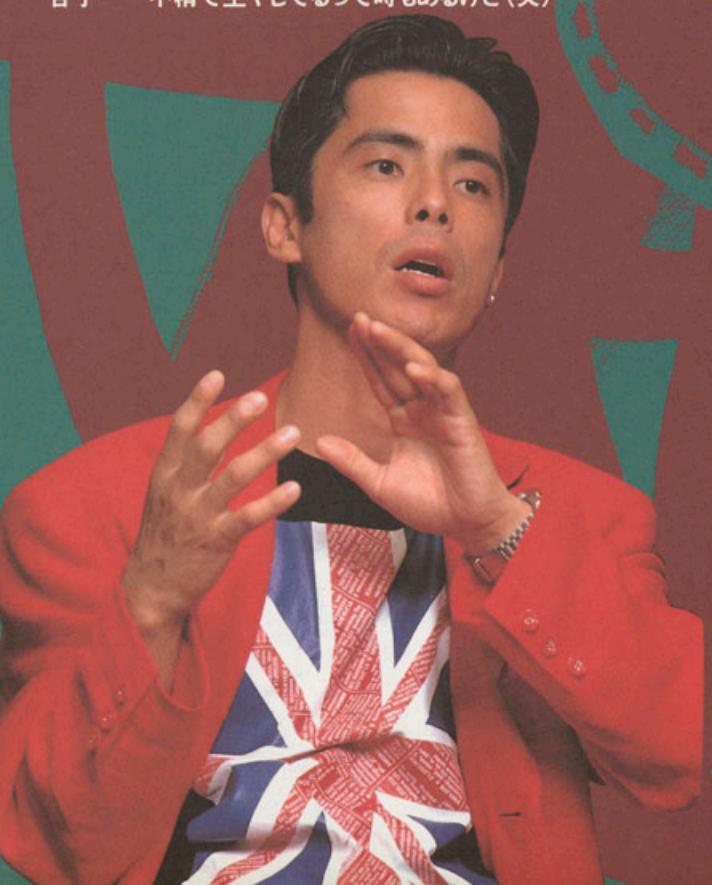
高岡 私、周囲の人間からは「しっかりしてる」とは言われるんですけど、ルーって娘は「ちゃっかりしてる」でしょ。そこがね、もちろん私は短いキャリアしかないけど、これまで全然やったことがない役で「わ、凄いな。できるかな」って気がしてた。私自身とも全然違うタイプの娘だから。それが杏子さんと対決するわけですよ。

田原 稽古の時から迫力あるもん。

高岡 南米とかって、やたら元気良さそうでギラギラしているイメージがあって——あ、一度も行ったことないんですけど(笑)——マルゴさんとの対決シーンにもそういうのが出てるのかなあ、なんて。とにかくすごい言葉でやり合うでしょ。と、「いいのかしら、こんなことまで言っちゃって」と思ってしまう。本音はとても快感なんですね。

杏子 私、もちろんこういう芝居というかミュージカルって初めてなんで、自分でもカオスというか混沌として





- るんだけど、なんか学校みたいな感じが面白いな、と思う。
- うしき 時々居残りさせられるからかい(笑)。
- 杏子 それもあるけど——今日も地獄の特訓があったし
- ね(笑)——それぞれ学級委員がいて、美化委員
- がいて、みたいにね。例えは情景を変える時も、自
- 分たちのバンドの場合は自分たちで動かすけど、
- 今回は舞台関係の人が本当に手際良くバババ
- ッと何幕の何ってやってくれるし、完璧に踊れる方
- がダンスは教えてくれるし、今は学校で全部習っ
- てるみたい。こういうのってなかなかいいな、と。
- 田原 他人事みたいに言ってる。
- 杏子 だって、まだ余裕ないでしょ。マックスに抱かれ
- て「あ、気持ちいい」なんてまでもいかないし。抱き
- 締められたら、ほら、「肩幅広い女だな」と思われる
- とイヤだから、もうちょっと細くなるようにすぼめよう、
- とか。手に汗かかないようにしよう、手を握られる時
- には、とか(笑)。
- 田原 もう、関係ないことばっかり考えてるんだから(笑)。
- うしき こっちは感じないって、そんなの。
- でも、座長のヒゲがだんだん濃くなるに従って、
- 「お、あとに引けないな」みたいのがあるよね。
- 杏子 不精で生やしてると時もあるけど(笑)
- 田原 気分をだんだん作っていこうと思ってたからね。ヒ
- ゲが黒くなるに従って芝居も形になっていく、とい
- う風に。
- うしき 僕も毛を抜いて(笑)。
- 田原 坊主じゃないんだから、毛を抜かなくていいの
- (笑)。
- 高岡 うしきさんが毛を抜くっていうのは?
- 杏子 いや、ほら、映画の『三文オペラ・リオ1941』でタイ
- ガーをやってたおっさんがハゲだったからね。それ
- に、本当はヒゲを伸ばしてさまになるんだったら伸
- ばしてやりたいんだけど、僕、伸ばすと汚ないんだ
- よねえ。どんどん広がっていつちゃってさ。で、やめ
- た。
- 杏子 私ね、今回はとりあえず自分はコマだと思っている
- の。演出家の亜門さんに動かしてもらって、クルク
- ル回って。
- 田原 早紀ちゃんを除いた僕たちって、演出の亜門さん
- も含めてほとんど同級生だもんね。なんかそういう
- わかり合えるみたいなところ、あるよな。だけど、亜
- 門さんの役者の動かし方、本当にうまいよね。だっ
- て、僕だってこんな偉そうにしているけど、コンサ
- トじゃない舞台ってまだ2回目だし、ほんと、みんな
- と同じスタートライン。それを、実にうまく動かしてく
- れるんだよね。
- うしき そう! いつもポンポンポンと、先に先に行っちゃって
- てね。
- 田原 すごくテンポ速いしね。自分が事前に練ってきた
- プランで僕らがやってみて、「あ、これは役者が気
- 持ち悪そうだからこういう風にしてあげた方がいい
- な」とか、そういうのを全部演出家の目として大き
- い器で見てて、的確にバツと動かしてくれる。だから、さっき杏子ちゃんが言ったように僕らは動かさ
- れるコマで、ほんと、裸で稽古場に来てるよね。
- うしき もちろん、それなりの心構えとかは各々あるけれど、
- 「これをこんな風に作ってやろう」なんていう次元じゃなく、演出がパンパンバーンと芝居づけしてくれ
- る時に、僕らもすごく答えを出しやすいし。
- 杏子 ワッと動きやすいくらいの、ありますね。
- 田原 それはすごく感じる。「やっぱ、すごいなあ、この人
- は」ですよ(笑)。

高岡

私の場合で言うと「大きく、強くやれ」というアドバイスをしてくれました。台詞がどうしても優しい感じになってしまふからって。亜門さんって、厳しいけど、細かいところまで面倒がらずに教えてくれる。私のやるルートがマックスに引っかけられるというか、私が彼をだます海辺のシーンがあるんだけど、「海だとお客様にわかるようにやってくれ」って(笑)。稽古場の、まだ装置もないようなところでの話で、最初とまどっちゃったけど、ああ、それがとても大切な、背景や装置だけに頼っちゃいけないんだな、とわかったような気がして……。

杏子

たとえともかくヒンシャなのね。私が歌う「愛で縛つて」で、客席に背を向けて、半分振り返る動きを振り付ける時に『四谷怪談』みたいに振り返って」って(笑)。なんか、はつきりはわからないけど、でも感じてわかっちゃうというのかな。そういうの、いっぱいある。

田原

たまに理解できない表現法や「あぶないなあ」っていうたとえもあるけど(笑)。それはそうと、歌唱指導の三沢先生も亜門さんも、女の子にはとても優しくない?

うじき

それ、あるつ! 歌唱レッスンも、「もう、うじきはいいな」という時ありますもんね。「ええーっ!」ですよ、こっちは(笑)。あと亜門さんもね、「ここは、じゃ、うじきと田原で考えて」。

田原

「休んどいて」ってのもあったじゃない。
「自由に動いて、もっと自由に。うじき、もっともっと自由に」。自由という名の不自由だ、こりゃ(笑)。

田原

「俺たち、あきらめられてるのかな」ってね。それにしても時期が早すぎるけど(笑)。

うじき

「あきらめられてるのかな」と言ったら「そう」って答えられましたからね(笑)。でもね、それでも自分で一生懸命、何か考えてくるじゃない。すると、それは全部ヒックアップしてくれるんだよね。そういう間口はドーンとしてる。うれしいよね、やっぱり。

杏子

じゃ、あきらめられてないですよ(笑)。
それぞれの立場から見た『マランドロ』の魅力・見せ場って、何でしょうね。

杏子

マルゴはね、こんなバカな女になっちゃいけないと
いう——私は信じられませんよ、こんな女は。

田原

ハハハハ。
でも、そこまで女を入れこませる男というのがいた
らすごいな、と。蹴っても蹴っても女がついてくると

高岡

いうような、ジゴロ的な色男なんて、滅多にいないもの。でも、同時にね、女の怖さ、したたかさをも味わえますよ、と宣伝しちゃう(笑)。

私も、生まれて初めてウェディングドレスを着られるっていうんで喜んでいたら、おなかが大きい(笑)。ほんとにちゃっかりしている娘なんだな、と思いましたね、ルート。それと、見どころというより聴きどころなんだけど、私の歌では「センチメンタル」が好きですね。今まで聞いたことがないみたいな音楽で。そのかわり、歌う時は半端じゃないくらい難しい(笑)。

うじき

音楽はね、すっごくいいけど難しいよね。俺ね、自分のことじゃないけど座長は本当に頑張ると思うんだ。本人を目の前にして言うの、変だけど。いまだに固定観念というか偏見で見るような人たちっているでしょ。「トップ・アイドルの——」とか。そういう人には絶対見て欲しい。絶対、驚くものに仕上がると思うから。なんか、既成の枠にとらわれないものが出てくるな、という期待、これは一緒にやっててもすごく感じるんだけど、それでワクワクしてしまう。

自分としては、なんかこういうドラマってまるつきりの絵空事じゃなくて誰しも起こってことだと思うんだよね。僕らの年代ならば当然一つや二つ、すねに傷ぐらいはあるはずでしょ。そんなのを演出の亜門さんにいろいろ手を替え品を替え、絞り出されてる感じがするんですよ。役もね、矛盾だらけで穴ぼこだらけなんだけど、そこがきっと逆に新しいとい





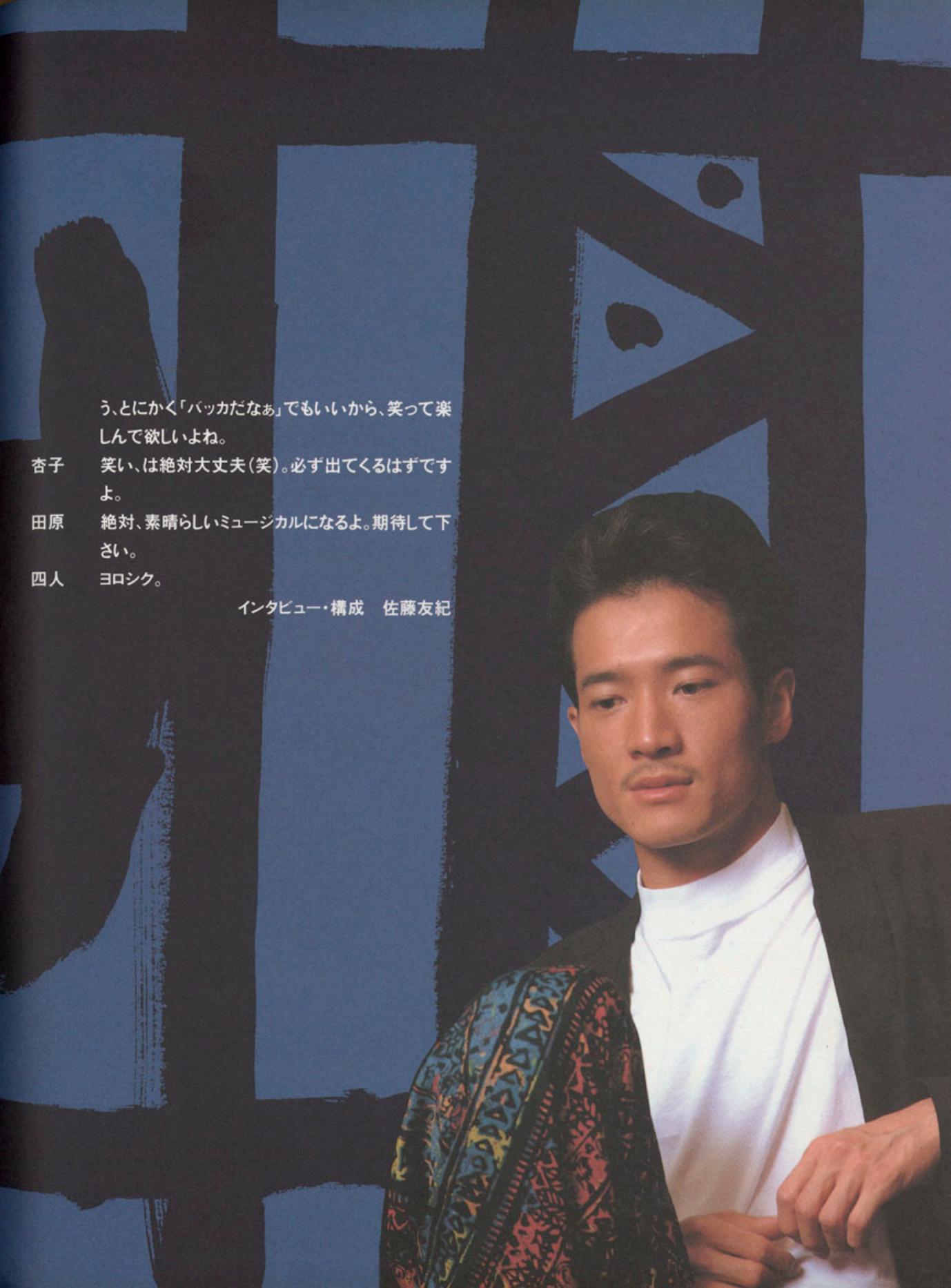
田原

か。それを見てほしいな、と思う。

ただし、タイガーとしては唯一エンディングに不満を持っている(笑)。マックスに戻って来られたんじゃ、寝つきが悪くなるな、と。

だけど、あれだって夢だか現実だかわかんないよ。おまけみたいなものだもん、あれは。そこからもうカーテンコールというか。南米だから、お祭りみたいに、何でもありって感じでそこがいいんじゃないかな。

僕は、本当の事言うとこのミュージカルに出ようと決めたのは、ひとつには、ファッションというのもあつたんだ。帽子かぶって、白いスーツで、煙草、そしてチャカボコチャカボコ、ライターを鳴らしてって。白いスーツって着る機会も滅多にないし、難しい。でも似合う男になってみたいっていう。こうやって喋つてるとみんな、子供っぽかったりもするけど(笑)。でもこの『マランドロ』の役柄はやっと演じられるか演じられないかの瀬戸際にいると思うんだ。というか、さつき話が出たように、本当はみんな、すねにいっぱい傷を持っててね。それを役に映らせられる年代だよね。そんなところも見て欲しいし。そうそ



う、とにかく「バッカだなあ」でもいいから、笑って樂しんで欲しいよね。

杏子 笑い、は絶対大丈夫(笑)。必ず出てくるはずですよ。

田原 絶対、素晴らしいミュージカルになるよ。期待して下さい。

四人 ヨロシク。

インタビュー・構成 佐藤友紀

ご挨拶

本日は日生劇場公演をご観劇下さいまして、まことに有難うございました。

私ども松竹は明治28年の創業以来今日まで長い歴史と伝統にはぐくまれた演劇への信条を、毎月の製作と興行の中に生きながら一生懸命お客様方にご奉仕させていただいております。

特にこれからは科学文明の益々進歩する時代にあって、

私たちの生活には、より豊かな文化が一層求められつつあります。

こうしたご要望にお応えできるよう、

松竹の演劇は優れた舞台の創造と、お客様方へのよりよいサービスを目指して参る所存でございます。

何かと不充分不行届きの点もあるうかと存しますので、

お気付きの点等がございましたら、ぜひ御教示いただければまことに仕合せてございます。

本日の御来場の御礼と併せて今後とも末永く御愛顧を賜りますよう心からお願ひ申し上げます。

1990年7月

日生劇場松竹公演

支配人 上野 昭

副支配人 金子 徹

スペシャルサンクス

万里村ゆき子

•

小幡久美(ヘラルドエース)

山口佳子(ヘラルドエース)

石川友也

•

国安真奈

金剛由生子

塙恭子(クルーベ・ド・ブラジル主宰)

•

ブラジル大使館

アートディレクション B2

PHOTO 山内順仁

数永清一(対談)

松竹写真部(ダンサー)

ヘア・メイク 吉田和則(田原俊彦)

鴻啓孝

イラストレーション 角田純

インタビュー協力 金澤有子

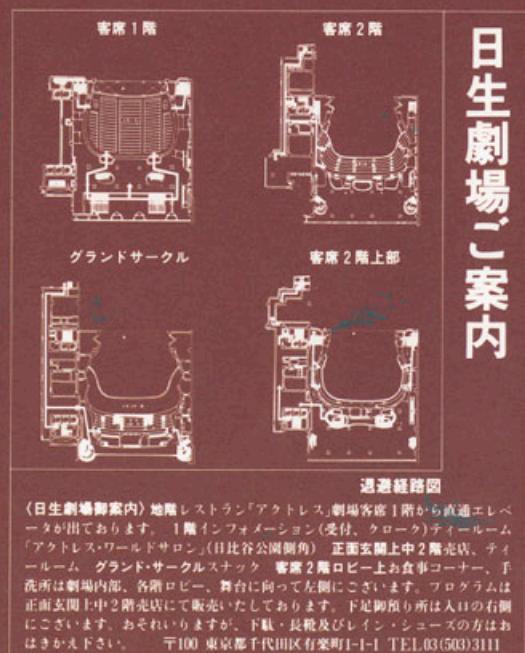
宣伝・編集 関エリ子

日生劇場公演プログラム「マラントロ」

発行 松竹株式会社演劇部 〒104東京都中央区築地1-13-5 TEL03(542)5551

印刷 杜陵印刷株式会社

1990年7月6日



〈日生劇場案内〉地階レストラン「アクトレス」劇場客席1階から直通エレベーターが出ております。1階インフォメーション(受付、クローケ)ティールーム「アクレス・ワールドサロン」(日比谷公園側角) 正面玄関上中2階売店、ティールーム、グランド・サークル・ナック 客席2階ロビー上お食事コーナー、手洗所は劇場内部、各階ロビー、舞台に向って左側にございます。プログラムは正面玄関上中2階売店にて販売いたしております。下足御預り所は入口の右側にございます。おそれいりますが、下駄・長靴及びレイン・シューズの方はおはきかえ下さい。〒100 東京都千代田区有楽町1-1-1 TEL03(503)3111

OPERA DO MALANDRO



マランドロ

OPERA ド MALANDRO

松竹株式会社

製作

アトリエ・ダンカン

原作・作曲

シ
コ
・
ブ
ア
ル
キ